三重大学大学院人文社会科学研究科 2012 年度修士論文

中国杭州西湖の観光地化の過程と世界遺産としての課題についての研究

地域文化論専攻　地域社会文化論専修

氏名：邰　阳

学籍番号：111M204

目　次

Ⅰ　序論・・1
Ⅱ　杭州西湖と観光業の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　1．杭州西湖の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　2．杭州の観光業の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ⅲ　近代以前の杭州西湖の開発と観光空間　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　1．隋唐時代の杭州西湖の開発と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　(1)　隋唐時代の杭州西湖の開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　(2)　隋唐時代の杭州の観光活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　(3)　隋唐時代の杭州西湖の観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　2．宋代の杭州西湖の開発と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　　(1)　北宋時代の杭州西湖の整備と観光活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　　(2)　南宋時代の杭州西湖の開発と観光活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
　　(3)　宋代の杭州西湖の観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　3．元代の杭州西湖の観光と衰退・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　4．明代の杭州西湖の整備と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　(1)　蘇堤、白堤の整備と西湖新景観の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　(2)　明代の杭州西湖の観光活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　　(3)　明代の杭州西湖の観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　5．清代の杭州西湖の開発と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　(1)　清帝南巡による杭州西湖の観光開発への影響・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　(2)　観光施設の整備と関連産業の発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　(3)　清代の杭州西湖の観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
Ⅳ　中華民国時代の杭州西湖の開発と観光空間　・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　1．インフラ・ストラクチャーの整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　2．観光業と関連産業の発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　3．中華民国時代の杭州西湖の観光地化と観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・27

Ⅴ　中華人民共和国設立後の杭州西湖の開発と観光 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
１．改革開放前の杭州西湖の開発と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
２．改革開放後の杭州西湖の開発と観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
(1)　西湖景勝区に関する整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
(2)　観光業と関連産業の発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
３．杭州西湖の観光の現状と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
(1)　「無料西湖」の観光政策と観光客数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
(2)　西湖景勝区の保護管理体制と効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
(3)　西湖景勝区の交通管理体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
(4)　杭州西湖の観光の特徴と観光形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
４．現代の杭州西湖の観光空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Ⅵ　世界遺産登録後の杭州西湖の観光 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
１．　世界遺産登録に関するアンケート調査の内容と分析・・・・・・・・・・・・・・46
２．　世界遺産の保護と観光地の持続性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
Ⅶ　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

注・・55
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

Ⅰ　序論

観光地理学は地理学の一分野として、1960 年代に生じた観光ブームとともにその研究が進められてきた。観光現象を基にした観光研究は各時代の経済、地域開発の計画、交通機関の発達また関連産業の発展などに関係があるので、これまでの観光地理学の研究は時代によって、その重点が違った。

日本の観光地理学の流れはまず観光ブームから大きな影響を受けた。1960 年代から 1980 年代まで、所得と余暇の増加により、大都市の周辺部の農山漁村に多くの観光客が流入し、観光需要の増大により、観光産業が発展し、観光地化が進んだ。そのため主に大都市周辺の温泉地、スキー型観光地、民宿型観光地を対象として、その発展過程、施設整備、観光客の流動などを分析した研究がみられた。山村（1967）は東京周辺の温泉観光地の発達段階を観光流動・宿泊施設・観光産業構成などを指標として設定し、その要因を東京からの交通条件と観光資本の投下のあり方に求め、その地域的展開を論じた。石井（1970）は民宿地域を「海水浴場立地型」と「スキー場立地型」の２つの類型に区分し、観光地域形成の過程と条件を明らかにした。淡野（1985）は三重県鳥羽市相差を事例として、沿岸域における民宿観光地域の形成と構造の変容について考察した。また、淡野（1986）近畿地方の沿岸域の事例を研究対象として、近畿地方の観光地域の発達と形成を三つの時期に分け、それぞれについて考察した。さらに、近畿地方の観光地域を類型区分し、各類型の特性を説明した。

山村（1977）によれば、当時の日本の観光地理学の研究内容は以下のように分類される。

① 観光施設・観光流動の分析と記述を主とした研究

② 大都市圏を中心とした観光地の立地や全国スケールでの観光地の展開を論じた研究

③ 個別観光地域の形成・発展過程を追求した研究

④ 地域変容の一因としての観光分析を取り入れた研究

⑤ 観光資源の分析を主とした研究

1990 年代に入ってから、観光地の立地、形成と変貌についての研究は依然として観光研究の主流であったが、その一方で、リゾート法が施行されたことによって、リゾート開発に関する研究が多くみられるようになった。呉羽（1999）は日本におけるスキー場開発過程を新規開発数、開発の内容およびスキー客の動向などの指標に基づき４つの時期に区

分し、それぞれの時期における特徴を明らかにするとともに、農山村における変化を明確にした。さらに、呉羽（2009）は、1990 年代の半ば以降の日本のスキー観光の衰退傾向について、スキーリゾート及びスキー観光客にみられる諸特性から示すとともに、スキーリゾートの再生の可能性について検討した。山村（1995）はリゾート開発の経緯と現状、開発構造、環境保全の面からリゾート地域のあるべき姿を明らかにした。しかし、鶴田（1994）は、これらの研究について、観光現象の諸要素の内的連関の中で位置付けられ、対象地域の社会経済の文脈を強く意識し、発展史的に捉えているという点で、その独自性を認めるが、応用研究的志向が希薄であるということを指摘している。これらの研究から見ると、観光行動の形態と観光地の機能・分布を論じた研究や観光流動から観光地の類型化を試みた研究などは日本の観光地理学の研究の主流であって、山村（1977）が分類した③及び④のところに該当するということが分かる。そして、その研究対象の大部分は大都市近隣の温泉地、民宿観光地、スキー・海岸リゾートまた農山漁村である。

その一方で、1980 年代から、「オルタナティブ・ツーリズム」という考え方が広がってきた。地域の自然や文化、社会を守ること、さらに、地域社会への貢献が重視されている。「オルタナティブ・ツーリズム」とは、具体的にはエコツーリズムやグリーンツーリズムなどをさす。「オルタナティブ・ツーリズム」の中でも、世界的なエコロジー意識の高まり、開発思想の変化もあり、特にエコツーリズムが注目されてきた（古村 2011）。また、1990 年代には、「オルタナティブ・ツーリズム」という用語は曖昧であるといった批判がでてきた。1992 年の国連地球サミットでは、「持続可能な開発」という概念が提起された。世界的な「持続可能な観光」概念の模索・展開に伴い、観光のあり方としても「持続可能な観光」の創出が課題となった。これを背景として、「ヘリテージ・ツーリズム」[1)]の研究が始まった。日本における「ヘリテージ・ツーリズム」に関する研究は 1990 年代になってから活発化している（峯俊 2011）。石森（2001）は「持続可能な開発」概念の創出と同時に提唱された「内発的発展論」に着目し、「内発的観光」概念を提唱している。この概念に基づく観光開発とは、地域住民や集団が地域固有の自然環境や文化遺産を持続的に活用する試みとなる。このなかでヘリテージ・ツーリズムは自律的観光を実現するものとして位置づけられている。こうした新しいツーリズムが展開されているのも主に農山村地域である。

こうした研究の動向を見てみると、一方で都市観光についての研究は少ないように思われる。都市の余暇活動に関しては、落合（1991）が神奈川県中西部における地域住民の行

動空間と構造を余暇活動を通して考察した。観光都市の構造に関する研究では、山村（2001）が中国の麗江旧市街地を事例として、観光商業化という視点からその空間ならびに社会の変容実態を具体的に明らかにした。そして、都市は商業、工業および居住の機能を満たす場所であり、都市観光についての研究では観光も都市経済の中の重要な要素として、その都市のほかの機能に関連して考察する必要があると指摘した。

淡野(2004)は都市の観光開発が進んでいる中で、その過程におけるいくつかの課題があると指摘した。例えば、都市観光の魅力をどのように高めるか、計画・管理システムをどのように組織化するのか、インフラ整備をどのように適合させるか、他産業とのリンクや環境との調和、または観光の持続性をどのように図るのか、このような課題を考えなければいけない。そして、単に観光そのものの直接的な経済効果に期待するだけでなく、観光を通じた都市の創生というべき壮大な意義を都市観光は有しているのである。さらには今日の観光は国際理解の増進、環境保全、文化振興などの意義をも担っているのであると指摘している。

以上より、これまでの観光地理学研究においてあまり注目されなかった都市観光の研究を進めることの意義は大きいと思われる。特に、都市内の観光空間は都市空間の一部に属し、市民のレジャー空間とも重なっている。現代都市内に位置する観光地の観光空間がどのように形成されたのか、また世界遺産に登録された都市観光地の持続性をどのように保つのか、それらを考察することは、都市観光の研究として意義があると思われる。本研究では、その一例として中国杭州の西湖をとり上げる。

中国杭州市の西湖は、歴史上数十回の整備によって、恵まれた自然環境に人工的要素が加えられ、中国の代表的な景勝地として、多くの国内外の観光客を惹きつけてきた。2011年6月には、杭州西湖はすぐれた文化的景観として、世界遺産に登録され、その人文的・歴史的・建築的な価値が世界に認められた。杭州西湖は典型的な都市観光地であり、その観光空間に関する研究は都市観光の研究の一部分といえるだろう。本研究では、淡野(2004)の研究枠組を杭州西湖に適用して、都市観光に関する課題を踏まえて、杭州西湖の観光地化の過程を明らかにして、さらに、世界遺産としての観光地が直面した課題と今後の方向性を検討してみたい。

これまでに杭州西湖に関する中国語文献は少数見みられる。その中では、各時期における西湖の観光開発・整備や関連産業の発展などについて述べられている。本論文では、これらの文献を基本資料にして、杭州西湖の観光地化の過程を把握したい。まず、時代ごと

に西湖を中心として、杭州の都市観光空間を分析し、その歴史的な変遷を明らかにしてみたい。それから、杭州統計調査ホームページ、浙江省国民観光状況調査などの資料を用いて、現在の杭州西湖の観光政策と観光産業の現状を説明し、その観光形態と特徴を分析することによって、現在杭州西湖が直面している問題点を提起する。最後に、筆者が現地で観光客を対象に行った杭州西湖の世界遺産への登録についてのアンケート調査の結果をまとめ、それに基づいて、観光客の意識の面で世界遺産としての名観光地がどのようにとらえられているか、そして、遺産保護をしながら、観光地としての持続性をどう保つべきなのかを検討してみたい。

Ⅱ　杭州西湖と観光業の概況

1．杭州西湖の概況

まず、杭州と西湖の概況について、張（2011）の記載をまとめて述べた。杭州は中国の東南部に位置し、浙江省の省庁所在地として、浙江省の政治、経済、文化と教育の中心である(図 1)。中国の歴史文化的に著名な都市として、七大都市の一つである。面積は 16,595 km^2 で、人口は 810 万人（2009 年）である。主に上城区、下城区、江干区、拱墅区、西湖区、浜江区、蕭山区、余杭区という 8 つの地区を含んでおり、西湖は西湖区に属する。杭州の中西部と南部は起伏の低い山が続く丘陵地形で、海抜は殆ど 500m 以下である。西湖景勝地の中で最も高い処は海抜 413m の天笠山である。杭州の東部は平原地形で、海抜は 3m～6m である。主な川は東西方向の銭塘江、南北方向の京杭運河と苕溪である。杭州の土地面積の中で、山地丘陵が 66%、平原が 26%、江・川・湖などの水域が 8%を占めている。

杭州は秦朝から現在まで 2200 年の歴史があり、「秦の始皇帝が銭唐に至り浙江を臨む」との記述が史記に見られるが、当時の杭州は「銭唐」と呼ばれていた。その後、隋朝に「杭州」という名称が固定された。唐代の中期から杭州は中国の重要な経済中心地になり、東南地方の大都会として、イタリアの商人・冒険者マルコ・ポーロに「世界で一番美しくて豪華な天城」と評価された。杭州では、良渚文化・呉越文化・南宋文化・明清文化のような時代ごとの文化の連鎖が生じ、「文化之邦」というイメージが与えられている。

杭州の代表的な観光地としての西湖は、杭州市西郊にあることから西湖と呼ばれている（図 2)。西湖の水深は平均 2.27m で、非常に浅い湖である。南北 3.2km、東南 2.8km、外周 15km、水域面積は 6.5 平方kmである。12,000 年程前に形成された潟である。この潟が漢代に淡水化し、「武林水・時聖湖」などと呼ばれた。西湖という名称が用いられるようになったのは唐代に入ってからだが、同時に「銭源」、「銭唐湖」などとも呼ばれており、その呼び名は固定していなかった。西湖の名称が固定したのは宋代に入ってからである。

西湖の自然の島である孤山、西湖を分ける人工堤の苏堤・白堤・杨公堤、人工の島である小瀛洲・湖心亭・阮公墩、分けられた湖の外湖・西里湖・北里湖・南湖・岳湖、これらをまとめた形状は「一山、三堤、三島、五湖」と称される（図 3)。昔から西湖の観光スポットは数回変更されたが、現在は「断橋残雪、平湖秋月、曲院風荷、蘇堤春暁、三潭印

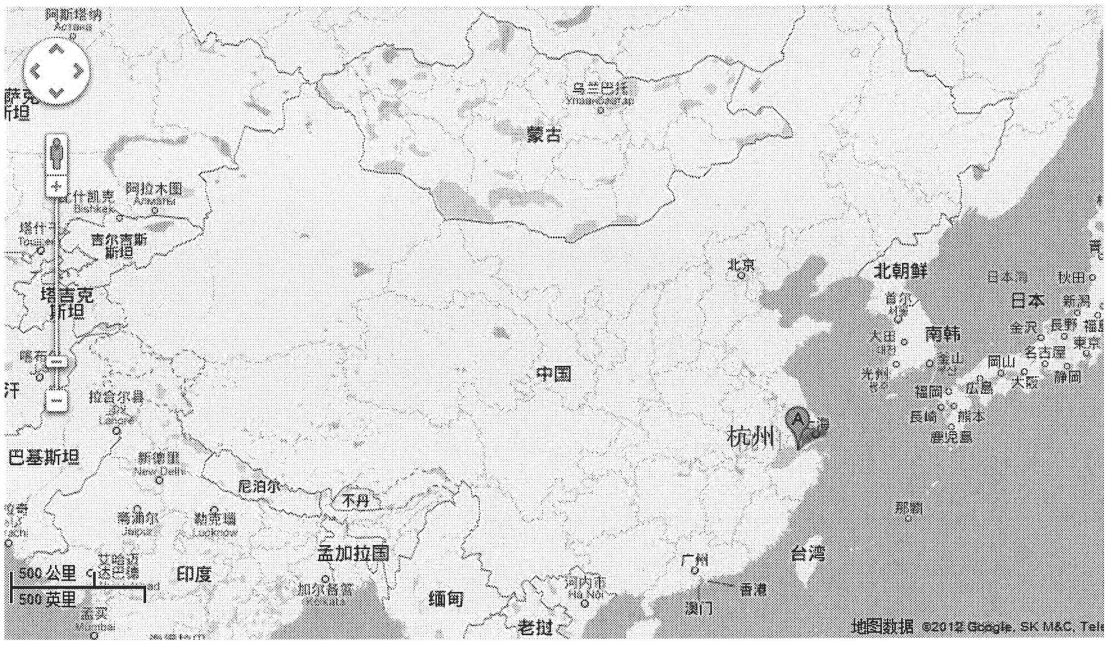


図１　中国杭州の位置

(Google マップより引用)

図２　杭州市地図

(Google マップより引用)

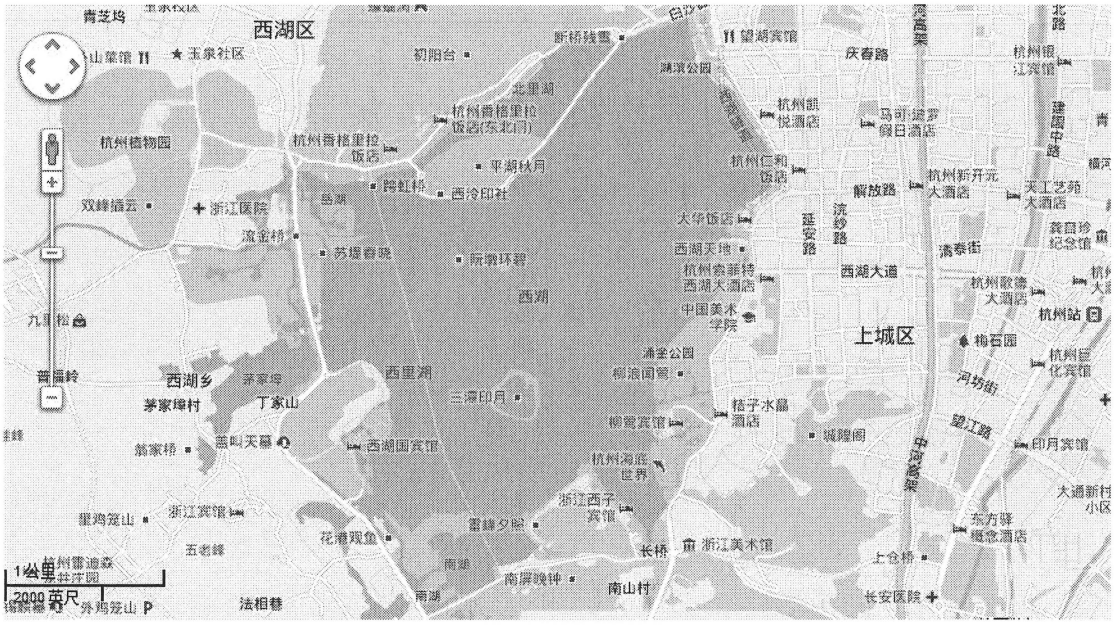
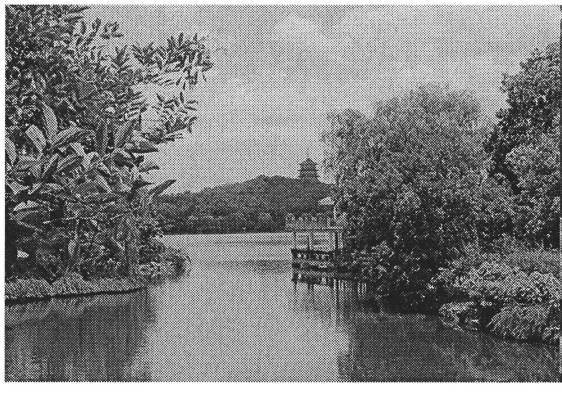


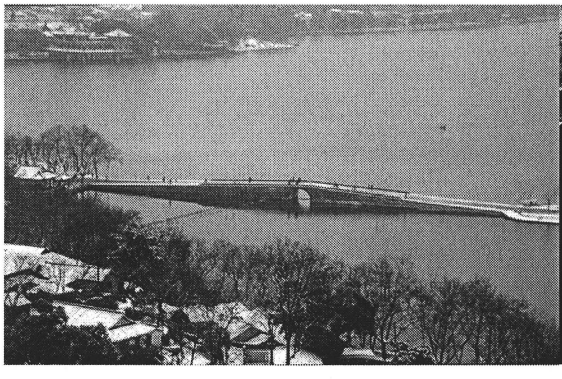
図 3　西湖地図

(Google マップより引用)

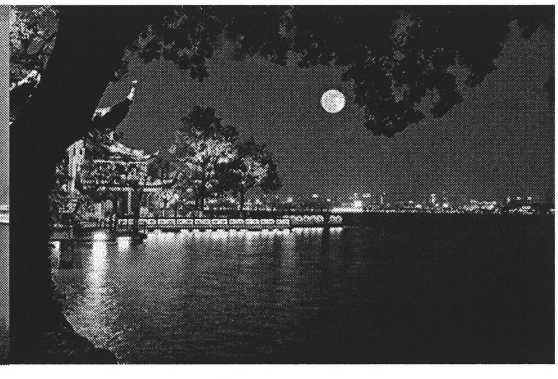


①蘇堤春暁

②曲院風荷

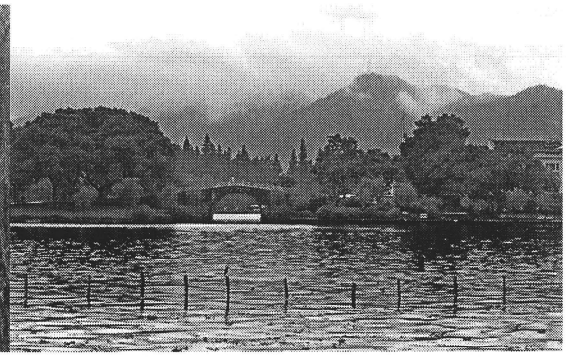


③断橋残雪

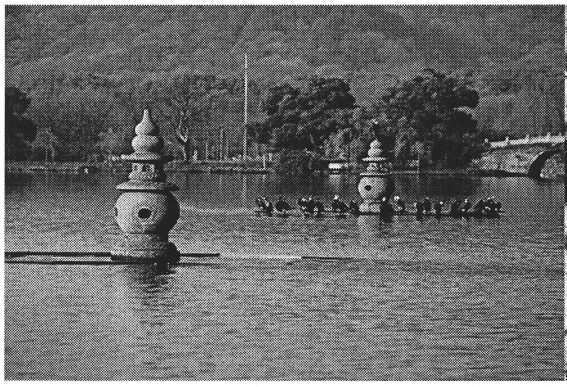


④平湖秋月

⑤柳浪聞鶯

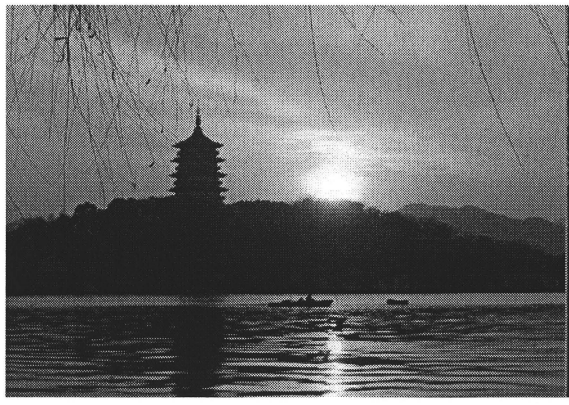


⑥双峰挿雲

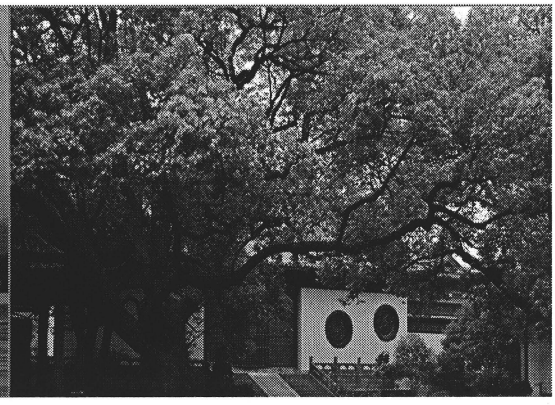


⑦三潭印月

⑧花港観魚



⑨雷峰夕照



⑩南屏晩鐘

写真１　西湖十景
（中国国旅ホームページより引用）

月、花港観魚、南屏晩鐘、雷峰夕照、柳浪聞鶯、双峰挿雲」という「西湖十景」（写真 1）に固定された。そして、それを基準として、「云栖竹径、満隆桂雨、虎跑梦泉、龍井問茶、九溪烟樹、吴山天風、阮墩環碧、黄龍吐翠、玉皇飛云、宝石流霞」という「新西湖十景」が形成された。山水の自然の美と人文歴史の融合が西湖の特色である。

西湖の 11 の景勝区の中に 100 以上の観光スポットが点在し、中国の歴史文化と景勝地の中で重要な位置を占めているので、1982 年に「国家重点景勝区」に指定され、1985 年

に「中国十大景勝区」と称された。2007 年には、中国の「国家 AAAAA 級景勝区」に指定された。さらに、2011 年 6 月の第 35 回世界遺産委員会で世界遺産（世界文化遺産）として登録された。中国で唯一の湖類の世界文化遺産である西湖は、世界でも数少ない湖類の世界文化遺産の一つである。

２．杭州の観光業の概況

さらに、張（2011）を要約して、杭州の観光業の概況について述べる。2000 年以上の観光史がある杭州では多くの自然観光資源と歴史文化資源が保存されている。国家級の景勝区・自然保護区・森林公園・リゾートが 10 ヶ所ほどある。さらに、国家、省、市の重点文化財が 60 ヶ所あり、博物館や記念館なども 20 ヶ所はある。

杭州の観光事業を管理する部門は杭州市観光委員会で、杭州市役所に所属する。この観光委員会には事務室、総合部、人事教育部、業務管理部、企画発展部、市場開発部、安全管理部、計画財務部、宣伝部などの部門が設置されている。そして、杭州市観光品質監督管理所、市観光情報センターなども併設し、全て杭州市観光委員会に属する。2002 年、国際観光都市の形成と西湖総合保護と整備工事を推進するために、また、西湖景勝区の世界文化遺産への登録が順調にできるように、杭州市役所が西湖景勝区委員会を設立し、西湖景勝区を全面的に管理することとなった。

2008 年時点で杭州市の観光業関連の旅行会社は 437 社に達し、その中で国際旅行会社は 41 社ある。ホテルは 247 軒で、市内には 160 軒がある。2002 年の資料では、飲食店は 17,000 軒に達し、その後も増加傾向が見られている。そして、2005 年の時点で、杭州市内では五つの観光客向けの商店街が建設され、シルク製品のような杭州の特色ある土産が販売されている。また、鉄道・高速道路・空路の建設につれて、杭州への交通が非常に便利になった。2008 年まで、杭州蕭山国際空港では 55 の国内航空路と 23 の国際航空路が整備された。

杭州統計調査信息網ホームページの情報によると、2010 年に杭州の観光客数は 6,581 万人（外国人観光客 276 万人）に達し、観光総収入は 1,025.7 億元である。近年、杭州市役所は「大杭州、大観光、大発展」という観光開発構想に基づいて、西湖景勝区を中心にする「観光西進」という戦略を積極的に推進している。

Ⅲ　近代以前の杭州西湖の開発と観光空間

杭州は長い時間を経て、著名な観光地として形成されてきた。杭州の観光業は春秋と魏晋時代に始まり、隋唐時代に発展し、北宋時代にさらに発展し、南宋時代に繁栄を極めた。しかし、元代に衰え、明清時代に再び繁栄期になった。

春秋時代に杭州が戦争の要地なので、各国の使者がよく通った。魏晋時代には仏教が広められたことにより、杭州のような都市が僧侶の旅行目的地になった。これらによって、杭州での最初の観光行動が見られるようになった。

杭州西湖を観光資源とすると、観光開発、観光行動が現われたので、観光の空間が形成できたといえよう。淡野(2004)は都市観光空間の構成を図5のように示している。まず、都市の観光空間と観光市場との間で需要と供給の関係が生じる。人々は日常生活で係わりのない空間の観光に関する情報を、エージェント、マスコミ、友人・知人などから得て、観光に使える時間と費用を考慮することによって観光需要が発生する。都市においては人文的観光資源、観光対象施設が観光対象の中心となってくる。人々は交通機関の媒介をへて観光対象に到達し、観光資源にふれる楽しみとともに、日常生活からの開放感を楽しむことにも期待があり、休息、飲食、買物、宿泊に対応した設備や施設の整備が充実されなければならない。こうした整備の良し悪しが観光資源そのものの評価にもつながってくる(淡野 2004)。図4は現代都市の観光空間の構造を示している図であり、近代以前に杭州の西湖を中心とした観光空間の説明に用いるのは適切だと言えないかもしれない。しかし、観光という行為が成り立つ。そして、観光空間が形成される上での基本要素（インフラ、資源、施設など）は時代を問わずに見られるものである。そこで、図4をモデルとして近代以前の各時期都市の観光空間を分析してみたい。

以下、張（2011）をもとにしてまとめて、時代ごとに杭州西湖に関する開発、観光活動と観光空間について見ていく。

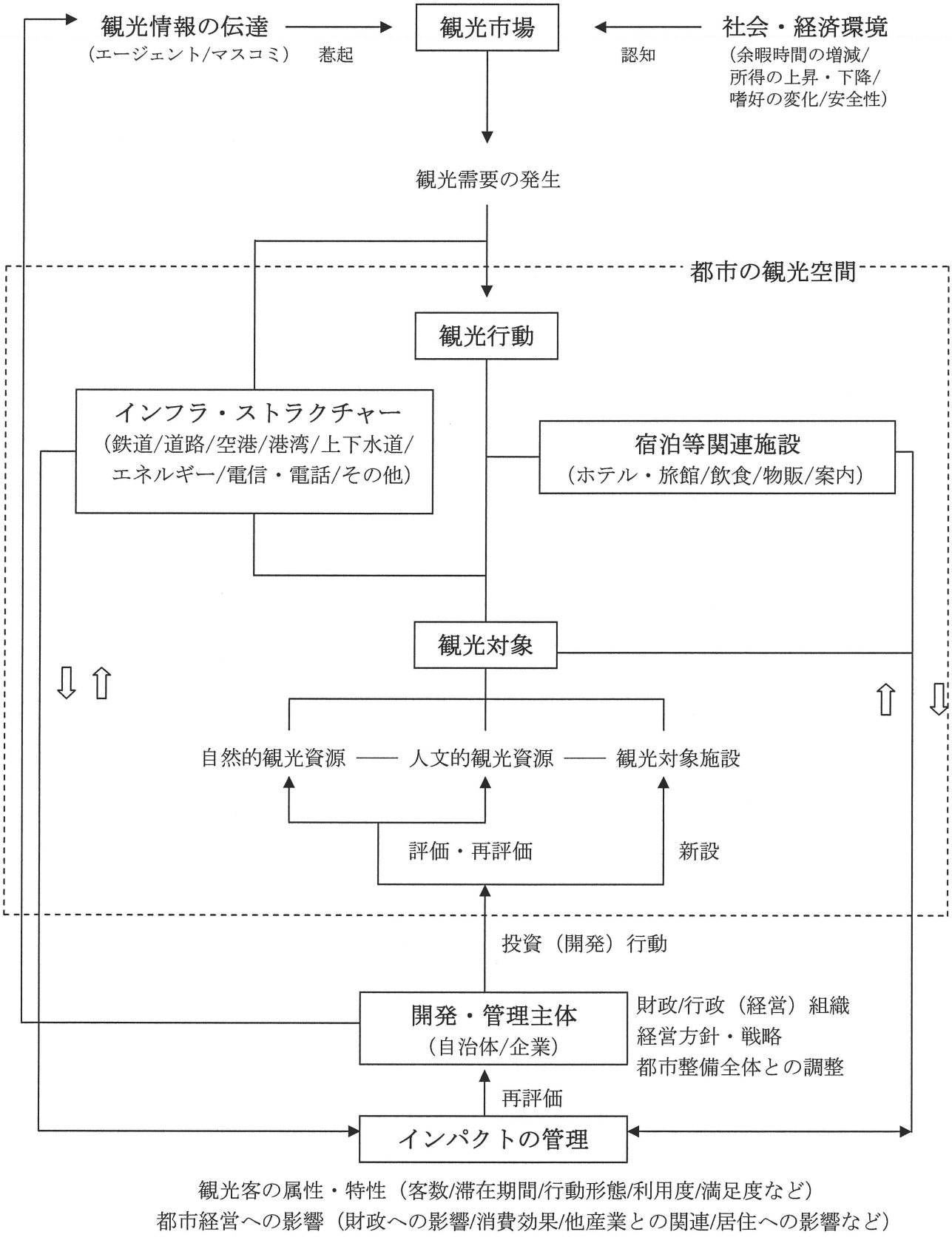


図 4　アーバンツーリズムの構造

淡野（2004）より引用

１．隋唐時代の杭州西湖の開発と観光

(1)　隋唐時代の杭州西湖の開発

隋唐時代に生じた西湖の観光開発に関する大きな出来事は二つある。一つは京杭大運河の開通である。西暦 605 年に、隋煬帝は東北と江南地域の統治を強化するために、自然の河川と昔からある人工の水路を利用し、洛陽を中心とした大運河を開通させた。京杭大運河は北の涿郡（現在の北京）から南の余杭（現在の杭州）まで、四段に分けられ、６つの省を通過し、全長 2,000 kmで、中国古代[2)]の南北交通の大動脈として重要な役割を果たすこととなった。京杭大運河の開通により、黄河と長江の水路がつながれて、唐代経済の南北交流と発展が促進された。こうした交通の利便性によって、全国の商人や文人墨客などの往来が絶え間なく継続し、唐代の観光が繁栄期に入った。杭州の観光名勝地としての西湖もたくさんの国内外の観光客を惹きつけた。

また、隋唐時代に白居易[3)]が行った西湖治水工事は西湖に関する初めての根本的な整備で、西湖の開発に重要な影響を与えた。唐代以前は、日照りになると、西湖の水が少なくなり、農業用水の供給ができなくなっていた。また、大雨の場合は、湖水が氾濫し、貯水もできなかった。これに対して、西暦 822 年に赴任してきた杭州刺史の白居易が西湖を修理し、堤を築いた。それで、西湖の面積は小さくなったが、新しい姿に変わり、現在の西湖の主な形態と特徴が形成された。西暦 824 年に白居易は「銭塘湖石記」を書き、石碑に彫って湖岸に立てた。この碑記は西湖水利に関する重要な歴史文献になったのである。中国の有名な詩人でもある白居易は杭州刺史として赴任していた間に、「西湖」という名称を使い、西湖の美を描写する詩をたくさん作った。これらの詩が広く世に伝わることによって、「西湖」という名称が西湖の統一的な名称として用いられるようになった。それだけでなく、白居易の詩で、西湖の名声が遠くまで響き渡った。こうして、唐代から西湖が美しい観光地として知られるようになり、歴代の文人墨客が西湖を誇り、文化的な作品の蓄積が始まった。

(2)　隋唐時代の杭州の観光活動

唐代の中期になると、白居易の修理と宣伝によって、杭州は観光地としての産業、交通、

そして観光資源などのような基本的な要素が揃って、観光業の発展が始まった。当時の観光行動には官遊、学遊、商遊、宗教遊という４つの種類があった。

封建時代[4)]には戸籍が当地にはない人が地方官吏を担当するという回避的な官吏制度が実施されていたので、官吏の任期が短く、転勤が多かった。よく転勤した官吏及び家族・親戚が人口の流動をもたらし、それに伴なって観光活動と消費が生じた。これは官遊と称される。次に、学遊は学問に励む人や科挙試験を受けに出かけていく人や有名な官吏に付き合うために杭州に来る人などが必ず西湖を遊覧することである。商遊は運河や河川を利用して来た内地商人と海道に沿って来た沿海商人が杭州で行う観光活動である。また、隋唐時代には仏教が盛んであり、お寺が多く、全国各地の僧侶や参詣者が参詣・遊覧に来て、お寺で宿泊した。これが宗教遊である。お寺には「知客」と呼ばれて観光客を案内する僧侶もおり、これは最初のガイドさんとも言えよう。お寺が実際的な観光客の招待所になった。

(3)　隋唐時代の杭州西湖の観光空間

以上述べたように、隋唐時代には文人墨客の詩歌によって観光情報を伝達し、京杭大運河の開通で遠い距離の移動ができ、杭州西湖を観光対象とする官遊、学遊、商遊、宗教遊という４つの観光行動が現れた。図５は隋唐時代の杭州西湖の観光空間を示している。しかし、これらの観光活動は新たに現れたばかりのもので、現在の観光とは違う。すなわち、当時の観光活動は官吏転勤などのような人口流動によって発生したもので、本来の目的に付随した２次的な観光なのである。観光が第一目的の観光とは言えない。また、当時の西湖に関する整備も観光のために行ったではなく、宿泊施設もなかったし、当時の西湖はいわゆる観光地とも言えないだろう。

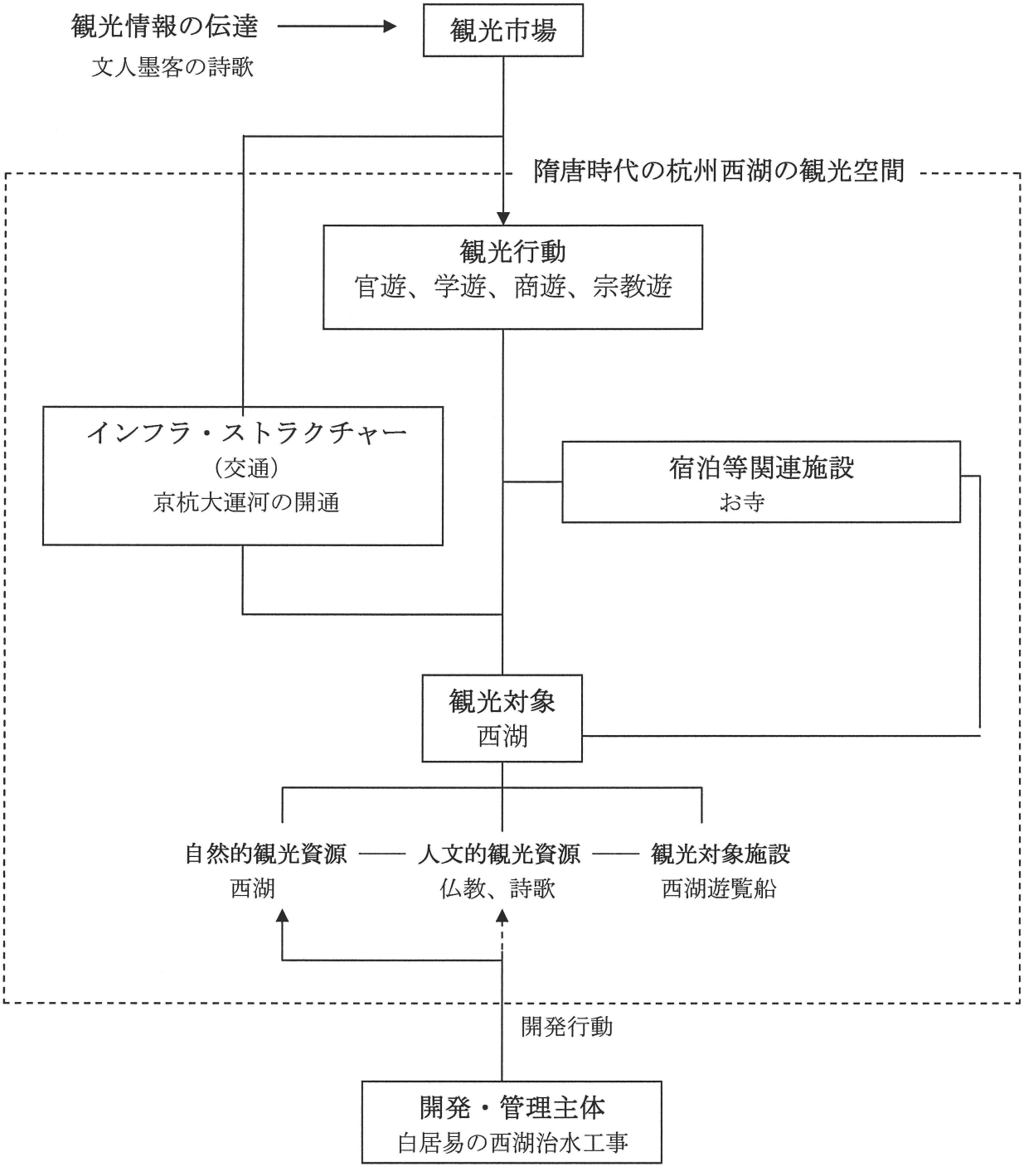


図５　隋唐時代の杭州西湖の観光空間
（淡野（2004）の図をベースにして作成）

２．宋代の杭州西湖の開発と観光

(1)　北宋時代の杭州西湖の整備と観光活動

北宋時代には西湖史上二回目の大工事が行われた。西暦 1089 年に、蘇軾が杭州知州を担当することとなった。その当時、日照りのせいで西湖が枯れるようになり、蘇軾は「乞開西湖状」を書き、朝廷に提出し、西湖を浚うことになった。半年をかけて、20 万の人力を利用し、６つの橋が結ばれ、西湖の南北をつなぎ、全長 3km で、平均幅 36m の堤を築いた。この蘇軾の功績を記念するために、この堤が「蘇堤」と呼ばれる。蘇堤にはたくさんの柳と美しい花が植えられ、「蘇堤春暁」は「西湖十景」の一つである。中国古代の著名な詩人としての蘇軾が西湖に関する多くの優秀な詩を作ったことによって、西湖が「文化山水」、「人文景観」になり、文化的な蓄積が厚くなったといえる。

また、北宋時代には新しい観光の特徴が現れ、宗教観光が杭州観光の重要な一部分になった。北宋は中央集権の国家で、統治者は民衆に対する思想支配を強化するために、宗教を重視するようになった。官僚は僧侶との交流に夢中になり、民間でも参詣活動が多くなった。西湖の近くにある東晋時代に築かれた霊隠寺は規模が大きく、たくさんの参詣者を惹きつけた。お寺は旅館のような宿泊施設になり、泊まる観光客が多かった。北宋末期に杭州の「妙行寺」は 20 年間で僧俗観光客約 300 万人を接待した。

(2)　南宋時代の杭州西湖の開発と観光活動

西暦 1129 年に、南宋は臨安（現在の杭州）を都にした。当時全国最大の都市としての杭州は人口が激増し、交通も頻繁になり、観光開発と観光行動も発展するようになった。観光や娯楽は南宋の社会気風なので、杭州の景勝区と観光路線の開発も政府に重要視されていた。杭州は地方都市から都になったので、西湖が都の観光名勝地として、その重要性は国家級レベルになったのである。西暦 1135 年から、西湖に関する整備が始まり、西暦 1279 年の南宋滅亡までの 100 年間に、比較的大規模な整備が 7 回行われた。また、西湖に沿って、多くの私家庭園が造られた。西湖を巡るいくつかの観光ルートが見られ、庭園はその観光ルートの中の美しい観光スポットとなった。

南宋の観光開発と発展によって、観光施設とサービスも整うようになった。南宋政府も

「四方客省館」という部門を設置した。これは外国の使者を招待する専門部門で、観光案内に従事する「伴使」と交通手段を提供する「架部」があり、政府専用の宿泊施設も建設された。西湖付近には宿泊施設が多く、文人墨客によく利用された。南宋時代は西湖遊覧の真っ盛りの時代なので、西湖の船舶の種類が著しく多くなった。観光用の遊覧船は数が多く、製作も精緻で美しかった。『夢粱録』[5] の記載によると、当時西湖の遊覧船は 100 隻以上あり、大きいのは 100 人を乗せた。西湖では観光用の遊覧船を見られるだけでなく、商売用の船舶もあり、果物、野菜、お茶、花などを売っていた。また、西湖景勝区の開発と観光客の増加につれて、西湖と杭州を紹介する書類が出版された。『地経』は杭州の最初のガイドブックである。『都城紀勝』、『夢粱録』、『武林旧事』などのような本も現れた。特に『武林旧事』は西湖を幾つの地区に分けて西湖の観光スポットを述べた。

南宋時代の杭州の観光活動は主に学遊、商遊、宗教遊と入国遊である。学遊、商遊、宗教遊は隋唐時代のものと似ている。南宋朝廷は、戦争のせいで、国庫が手薄になった状態の中で、高宗皇帝の時代に国際貿易を促進する政策を実行した。当時、南宋と貿易往来がある国家は 50 以上で、貿易によって各国の使者や商人が頻繁に杭州に来て、西湖の観光客になった。南宋時代には皇室から民衆まで、観光が流行っていた。皇室の観光活動は主に御用景勝地を遊覧することと民間巡遊である。皇室人員は西湖を遊覧する時に皇室専用の遊覧船「御舟」を利用した。その外観は精緻で大きく、数も多く、非常に壮観であった。一方、民衆の生活は十分に豊かではなかったので、季節と祝日に合わせて、観光や娯楽を行うしかなかった。民衆の季節的な祝日の観光活動は殆ど西湖を対象として、多くの行事や遊覧活動を行った。

(3) 宋代の杭州西湖の観光空間

図 6 は宋代の杭州西湖の観光空間の構造を示している。宋代には統治者が仏教を重視していたので、宗教観光という社会環境が形成された。そして、文人墨客特に著名な詩人としての蘇軾の詩歌による宣伝は西湖への観光活動を活発化した。西湖での年中行事が現われ、皇室から民衆まで遊覧活動が普及した。そして、各国の使者を招待するために、政府専用の宿泊施設も建設され、西湖付近にも民間宿泊施設が現れた。また、西湖に沿って、多くの私家庭園が造られたことによって、庭園はその観光ルートの中の美しい観光スポットとなった。当時、西湖を巡るいくつかの観光ルートが見られた。さらに、南宋時代は西

湖遊覧の真っ盛りの時代なので、西湖での船舶の種類が著しく多くなった。つまり、宋代には観光対象としての観光資源と観光施設も充実された。

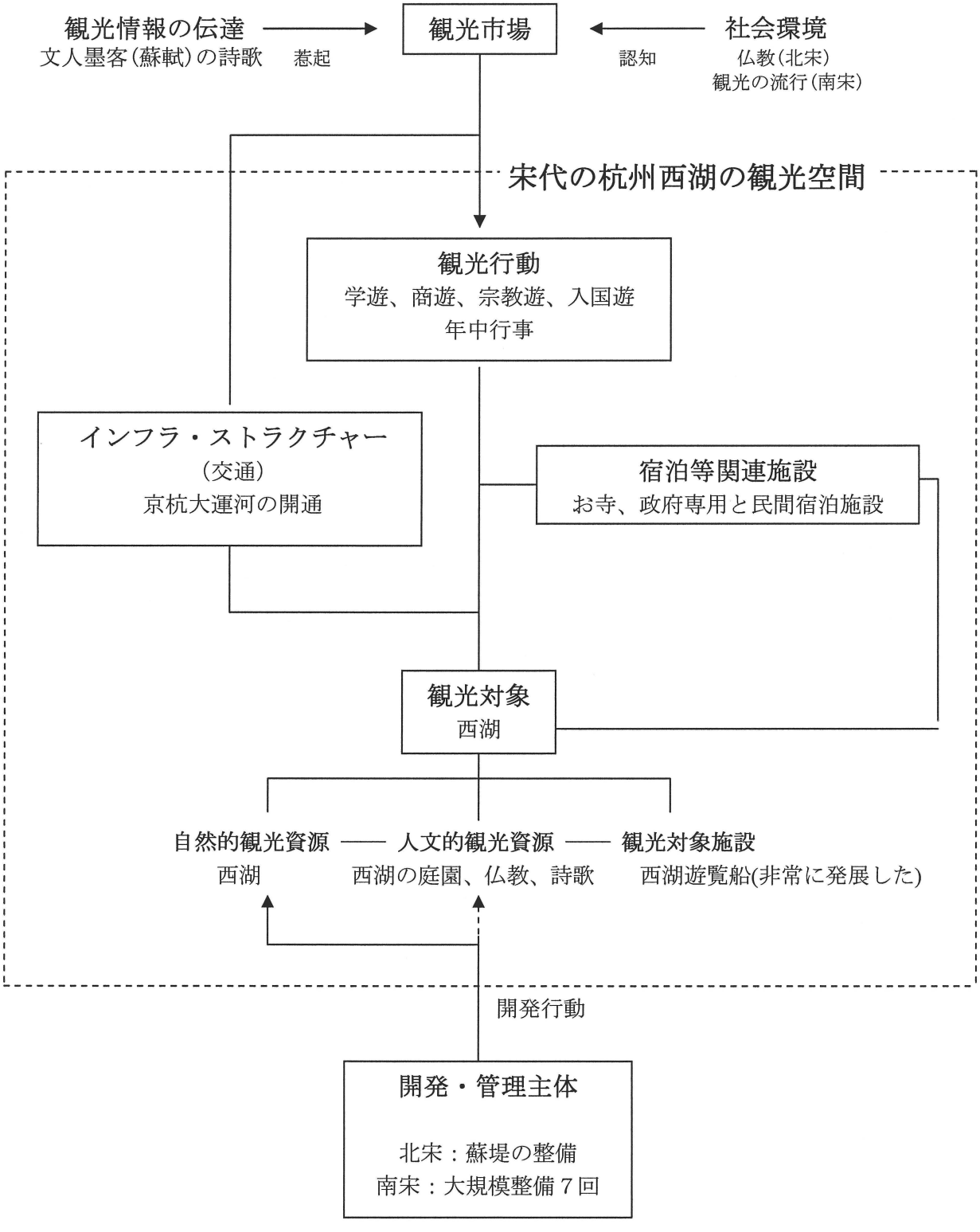


図６　宋代の杭州西湖の観光空間

(淡野(2004)の図をベースにして作成)

３．元代の杭州西湖の観光と衰退

西暦 1279 年に南宋は滅亡して、モンゴル族が設立した元朝は大都（現在の北京）を都にした。杭州は江浙行省（現在の江蘇省と浙江省）の首府として、南部の経済と文化の中心で、元代の南北の経済文化交流の中枢であった。元代の統治者はモンゴル族で、領土の拡大に夢中になったので、西湖の開発があまり進められなかったので、西湖の景観は南宋時代とはほぼ同じである。唐、宋、元代の文化の繁栄と発展につれて、文人墨客が西湖に関する数多くの唐詩、宋詞、元曲などを普及させ、元代の西湖は既に全国の最上位の観光地と評価された。南宋に起源がある「西湖十景」が元代にも非常に流行し、西湖景色の最も良い代表的な景色と称された。しかし、元代後期になると、政治的暗黒で官吏が腐敗し、西湖は地方の有力者に私有化され、耕作地に転用された部分が多くみられ、かつての西湖の姿がなくなる状態に迫っていた。

４．明代の杭州西湖の整備と観光

(1)　蘇堤、白堤の整備と西湖新景観の形成

明代に社会が安定してきたことによって、経済が回復し、西湖に関する整備工事が少しずつ行われてきた。政府は西湖を浚渫し、水門を建設し、湖を造り、または豪家の湖水私有化を禁止するような政策を実行した。

唐代に築かれた蘇堤は長い間修繕しなかったので、だんだん破壊されていた。そして里湖が全部私有化され、昔の西湖の美しい姿が見られなくなった。西暦 1508 年に、楊孟瑛は蘇堤を修理し、柳を植え、蘇堤が昔の様子に回復された。しかし、その後は修理がなく、蘇堤は再び破壊されることとなった。西暦 1533 年に、杭州知県（知事）が罪人を使って蘇堤で木を植えさせて、蘇堤の姿が回復された。その後、戦争のせいで、蘇堤は再び破壊された。西暦 1574 年に、塩運使の朱炳は柳を植え、蘇堤が回復された。また、白堤は蘇堤と同じように、長い間修繕しなかったので、破壊されていた。西暦 1589 年に、孫隆は白堤を修繕し、樹木と花草を植え、明代に白堤が「十錦塘」とも呼ばれることとなった。このようにして、西湖の景観が回復された。

さらに、明代には新しい堤が築かれた。西暦 1508 年に、楊孟瑛は西湖を浚渫し始め、

５ヶ月を経て、蘇堤を回復し、西湖から掘り出された沖積泥を利用して里湖の西岸に堤を築いた。後世には楊孟瑛の功績を記念するために、この堤は「楊公堤」と称された。楊公堤でも６つの橋が造られ、蘇堤の六橋とともに「西湖十二橋」と呼ばれていた。明代には「西湖十二橋」は非常に賑やかで観光遊覧の人が多かった。

西暦 1576 年に「湖心亭」が建てられ、1607 年に「放生池」が造られた。西暦 1611 年に、銭塘県令楊万里は前人の功績に基づいて、10 年をかけて「小瀛洲」と三塔を築き、現在の「西湖十景」の一つであるの「三潭印月」が形成された。

(2) 明代の杭州西湖の観光活動

船に乗って西湖を遊覧するのは西湖観光の主な方式である。明代の西湖遊覧船の種類は南宋時代とは比べ物にならないが、官僚が特色ある遊覧船を自製することが見られた。また、「龍舟競渡」は昔からの行事で、杭州では最も盛んである。「龍舟競渡」の日になると、たくさんの観光客が来て観覧し、その様子は非常に壮大であった。秋になると、西湖での月見も明代に流行っていた。

明代の西湖は当時の最も有名な観光地で、文人墨客が西湖を遊覧し、たくさんの優秀な文学や絵画作品が現れた。李流芳、袁宏道、徐渭などの名家は西湖の美しさを描写し、西湖での見聞を記録し、西湖に関する本を書いた。それだけでなく、西湖は海外観光客をも惹きつけた。特に、日本からの遣明使は数多かったのである。その中の画家は西湖を対象にして、たくさんの絵を描いた。明代末期に、キリスト教が中国で広がり、数多くの西欧からの布教師は杭州で布教しながら、西湖を遊覧したのである。

(3) 明代の杭州西湖の観光空間

図 7 は明代の杭州西湖の観光空間を示している。観光情報の伝達においては文人墨客詩歌だけでなく、文学や絵画作品もその役割を果たしていた。そして、外国にも伝えていた。こうして、観光活動は盛んになり、年中行事もよく行われた。旅館などの宿泊施設が増加し、酒屋や茶屋など関連施設も現れた。西湖に関する開発は元代で破壊された景観を回復し、その上に、新しい景観を造った。

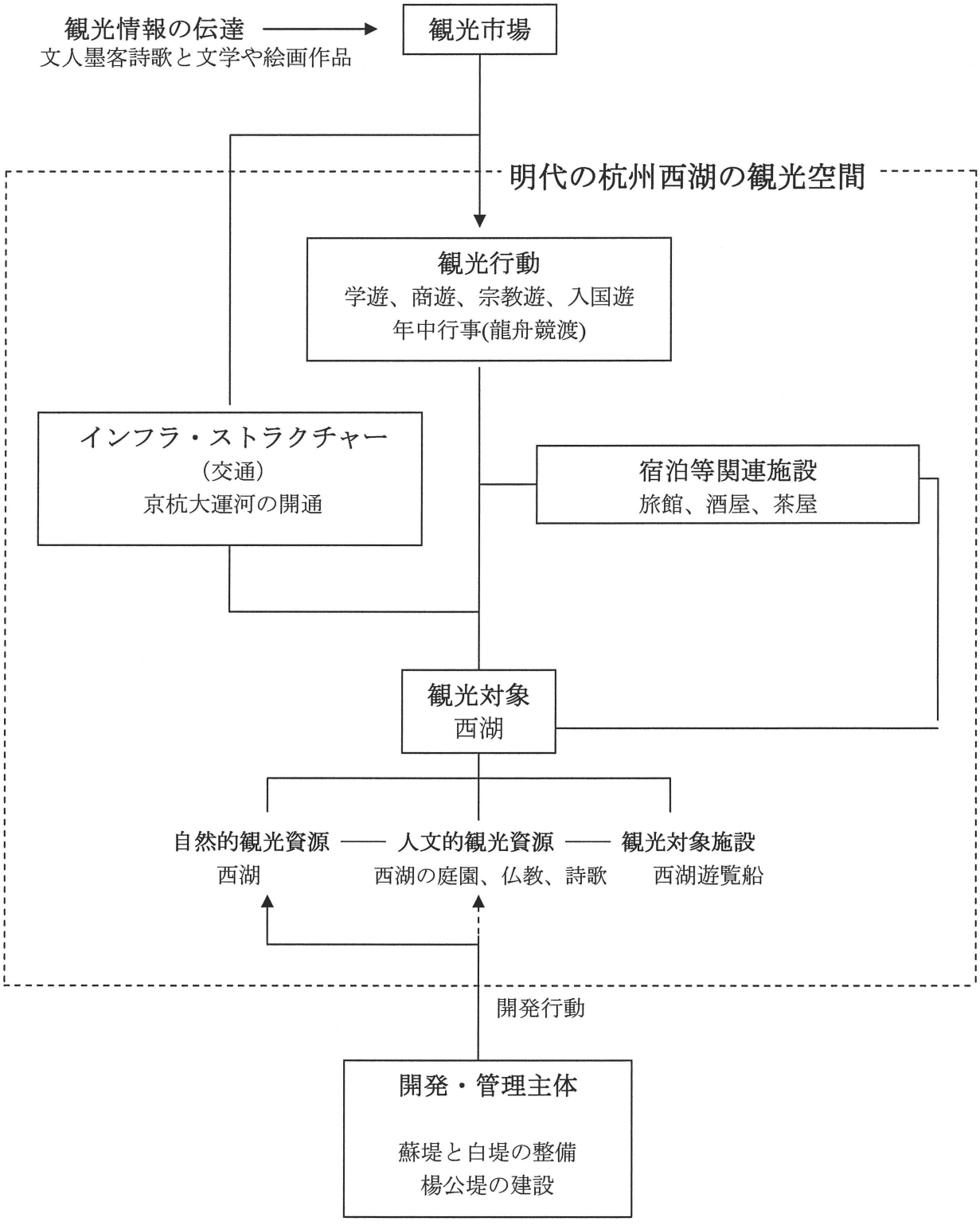


図 7　明代の杭州西湖の観光空間

(淡野(2004)の図をベースにして作成)

５．清代の杭州西湖の開発と観光

清代の政治統一、社会の安定、産業と文化の発展につれて、杭州の観光業は再び繁栄してきた。清代の康熙皇帝[6]と乾隆皇帝[7]の南巡によって、杭州の観光開発が促進されたことは清代杭州の観光開発の特徴と考えられる。この清代杭州の商貿観光の発展は近代以前の最高峰に達し、現在の杭州観光業の大発展の土台になると言えるだろう。

(1)　清帝南巡による杭州西湖の観光開発への影響

清代は満族が設立した王朝であり、設立初期には漢民族は少数民族としての満族に対する恨みがあったので、康熙皇帝は民族の矛盾を緩和しようとする政治的な目的で、6回の南巡を行った。その中の5回は杭州を目的地にした。そして乾隆皇帝の南巡は主に個人の遊覧と娯楽を目的として、6回の南巡では全て杭州に来た。これら清帝南巡の目的に関わりなく、その南巡は結果的に杭州の観光と開発を促進したといえる。

杭州は清帝南巡の目的地として、施設の整備が最初に必要とされたので、河川の浚渫や埠頭の建設のような工事が行われた。特に、西湖を浚渫することが重視されるようになった。雍正年間[8]には、西湖の面積は7.54 km^2であるが、そのうち土砂が溜まる面積は0.2 km^2であった。雍正5年（西暦1727年）に、巡撫浙江都察院右副都御史の李衛は西湖を浚渫し、金沙港、赤山埠、丁家山、茅家埠に堰を一本ずつ作った。西暦1800年に、浙江巡撫阮元は西湖から掘り出した沖積泥を利用して短い円柱形の台（現在の阮公墩）を作った。これによって、現代西湖の輪郭が形成された。そして西暦1864年に、「西湖浚湖局」が設立された。

また、清帝南巡によって、西湖の観光スポットの建設も数多く行われた。雍正年間に、李衛は康熙皇帝が遊覧したところを修繕しただけでなく、それに基づいて観光スポットを増やし、「西湖十八景」を書き連ねた。さらに、皇帝が訪ねたところに石碑が立てられ、新しい観光スポットになった。乾隆年間の杭州のガイドブック『湖山便覧』[9]によると、西湖の観光スポットは1,016ヶ所になった。

さらに、康熙と乾隆皇帝が西湖に関するたくさんの詩文を作ったことによって、西湖に新しい文化が与えられ、その美しさが広く知られるようになった。

(2) 観光施設の整備と関連産業の発展

清代は西湖の船舶の大発展期であり、100 以上の名前が付けられたと言われ、それらは官船と私船、実用船と遊覧船に分けられた。その製作技術は高くて種類も多かったのである。官船は皇帝用の「御舟」と州府用の公船であり、遊覧船は殆ど私船である。実用船は交通船、貸し船、采蓮船、書画船、斎船、水上芸術船などの種類があった。遊覧船は「画舫」ともよばれ、明代のまねをしたものが多く、主に活動舟、風帆、竹製画舫、少年船、車船といった５つの種類があった。

清代に杭州の龍井茶が非常に名高くなったことによって、杭州の茶屋も盛んになった。杭州市内の各埠頭、重要な道路、貿易地に茶屋が密集していた。西湖の周辺と近くの遊覧船埠頭であるの涌金門にある茶屋は数多く、有名になっていた。そして、当時西湖に特色ある「船茶」が現れた。これは小型遊覧船に小さい四角い机と椅子を置いたもので、船を漕ぐのは「船娘」と呼ばれた女子であった。お客が船に入ったら、船娘はお茶を提供し、船を漕いで流動茶屋になった。

清代では杭州の繁栄につれて、飲食業もかなり発展した。当時、豪華な飲食店が 100 軒以上あったと言われ、今でも残存している有名な飲食店の中で、政府官営は 13 軒あり、民営のは約 20 軒ある。

杭州観光業の発展によって、土産品も多く見られるようになった。この時代の土産品は実用性を主としており、シルク製品、龍井茶、張小泉鋏、舒蓮記扇子、孔凰春香粉などは杭州の土産品になり、観光客に好まれた。

(3) 清代の杭州西湖の観光空間

図 8 は清代の杭州西湖の観光空間の構造を示している。明代の回復に基づいて、清帝南巡のために、観光対象としての西湖に関する整備が数多く行われた。そして、皇帝の詩文と南巡によって、西湖に新しい観光スポットと観光文化が創られた。清帝南巡を中心として、清代の観光空間が変わってきて、さらに充実するようになった。しかし、社会全体が豊かではない封建時代には、一般の人にとって、観光はまだ簡単にできることではないので、封建時代には大衆的な観光はないといえるだろう。しかし、封建時代には、数回の整備によって、現代西湖の輪郭が形成された。文人墨客の詩歌などによって、西湖が名勝地

として知られるようになった。宿泊などの関連施設も大きく発展した。つまり、近代以前は次の時代の大衆的な観光地になる条件の形成期またはその準備の段階と考えられる。

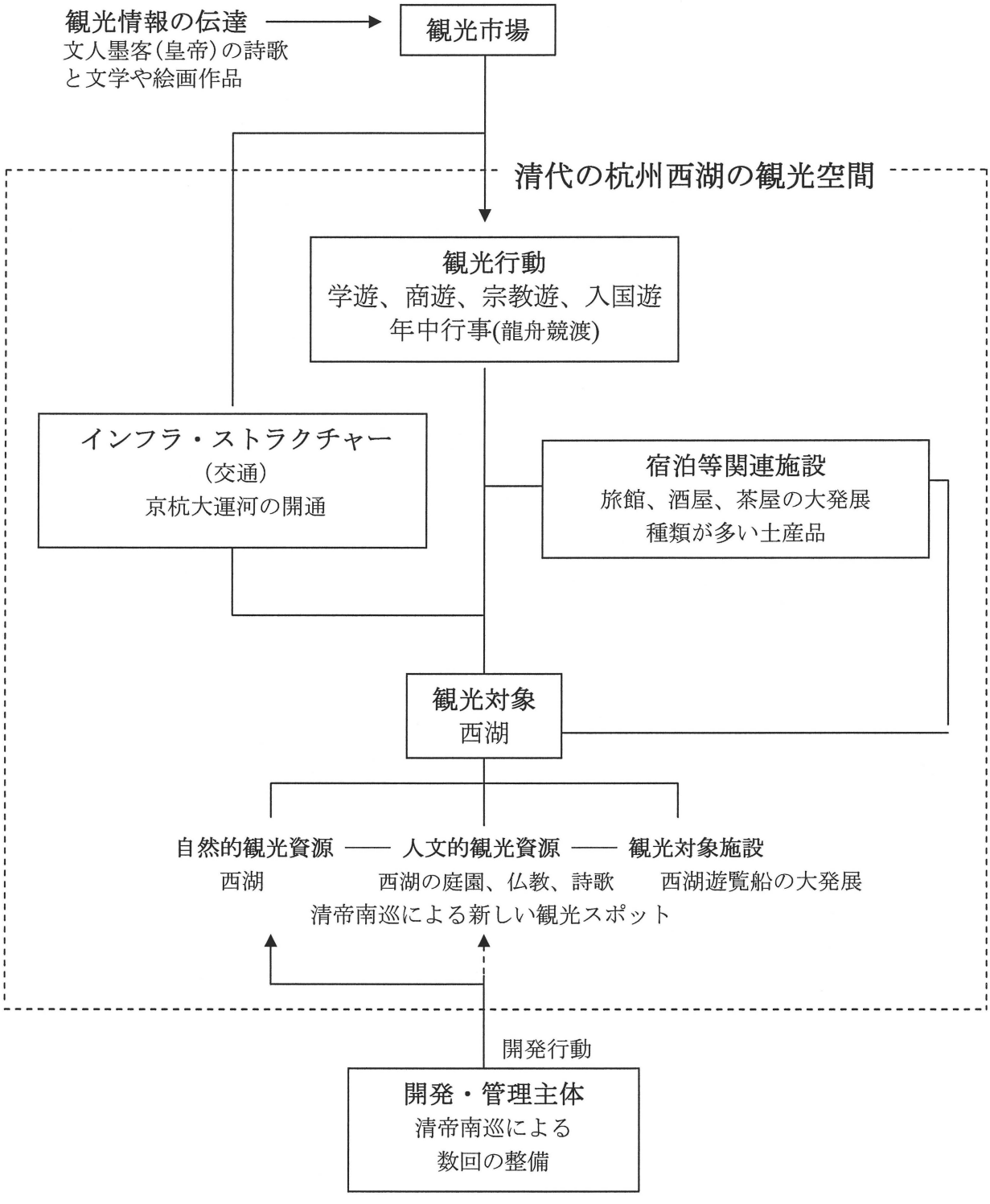


図８　清代の杭州西湖の観光空間

(淡野(2004)の図をベースにして作成)

Ⅳ　中華民国時代の杭州西湖の開発と観光空間

中華民国[10]時代に杭州の近代化が始まり、特に1927年に杭州市になってから、市政建設と産業が急激に発展してきた。しかし、第二次世界大戦が始まってから、杭州の観光は停滞した。第二次世界大戦後、杭州は再び短い発展期間を迎えた。都市の変化につれて、杭州観光業の発展は困難であるが、少しずつ進んできた。以下、張（2011）をもとにして、中華民国時代の西湖に関する観光開発と観光活動をまとめ、中華民国時代の杭州の観光空間を分析してみた。

1．インフラ・ストラクチャーの整備

中華民国初期に、杭州は中国の中で近代交通の発展が最も早い地域の一つであった。当時、杭州を中心とした鉄路は滬杭鉄路と杭江鉄路である。滬杭鉄路は1910年に全線開通された、上海と杭州の間の鉄路である。中国の経済中心としての上海に繋がったので、杭州の経済地位が向上された。1934年には、杭州から江西省までの杭江鉄路が全線開通され、これは東南地域の交通の大動脈になった。

また、中華民国時代における、杭州市内の道路建設は三つの段階に分けられた。第一段階は1911年（浙江軍政府設立）から1927年（国民党杭州市政府設立）までで、この間には政局が動揺し、戦争が多かったので、道路建設は遅く、そして、全て砂利で敷かれた道路であった。その後、1922年に環湖道路が開通したことによって、西湖の交通がよくなり、都市の発展も促進された。そして、自動車を利用できるように、白堤と蘇堤の道路も改修された。第二段階は1927年から1937年（第二次世界大戦開始）までで、杭州の道路建設が急激に発展してきた時期だと言えよう。この間に建設された道路は主にアスファルト道路であり、杭州市内で合計10万km^2のアスファルト道路が建設された。そして、杭州を中心としての自動車道路網もこの期間に建設された。第三段階は1937年から1949年（中華人民共和国設立）までで、杭州道路の停滞期である。この間には、新設の道路が少なく、道路の改修も困難であった。

杭州市内の道路の建設に伴い、交通手段も変わった。中華民国初期には、旧来の交通手段としての駕籠と近代に発明された人力車が併用され、これらが杭州市内の主な交通手段になった。その後、人力車の使用率は増加傾向で、次第に駕籠に取って代わった。民国中

期になると、自動車が出現した。1937 年まで杭州市内の自動車会社は 24 社あり、旅客運輸用の自動車は 80 台あったと言われた。

交通以外の面でもインフラ整備が進んでいた。1908 年に民営の浙江大有利電気株式会社が設立され、1910 年に発電所が建設され、電気を提供した。その後、1922 年に艮山門発電所が建設され、1932 年に閘口発電所が建設された。1928 年に水利準備委員会が設立され、1930 年に清泰門浄水場が建設され、杭州で上水道が利用できるようになった。また、1912 年に杭州の電話網が一応完成した。1927 年の杭州市設立後、電気通信業はさらに発展していた。1936 年に、浙江省電報網も完成した。

2．観光業と関連産業の発展

中華民国時代には、杭州の観光資源が整備され、西湖の観光スポットが増加した。西湖の周辺に公園や記念館が多く建設され、かつての建物も修理された。西湖での観光活動は大変盛んであった。1929 年に、第一回の西湖博覧会[11]が杭州西湖で開催された。参加者数は約 2,000 万人に達し、会期は 137 日間に渡った。これは中華民国時代における杭州での最も盛大な行事といえるだろう。この西湖博覧会は西湖の観光と杭州観光業の発展を促進した。

観光活動の頻繁化につれて、中華民国時代には杭州で最初の旅行会社が設立された。これは杭州の観光発展史上で最も画期的な出来事である。1923 年に、上海商業貯蓄銀行観光部が設立され、同年に杭州で支社を設立した。その後、中国旅行会社杭州支社と改称し、杭州中国旅行会社とも呼ばれた。これは杭州で最初の観光株式会社である。杭州中国旅行会社は杭州の観光ルートを整理し、新しいルートを企画した。その営業内容は殆ど現在の旅行会社と一緒であり、当時非常に注目された。特に、1929 年の西湖博覧会で観光客に各種の観光サービスを提供し、業務を拡張した。しかし、第二次世界大戦が始まってから、休業し、1945 年に、営業を再開した。その後、杭州では他の旅行会社も設立された。

杭州観光の発展と西湖博覧会の成功によって、杭州に来る外国人観光客が増加した。これによって、1932 年に杭州市役所は「杭州市観光客局」を設立した。これは外国人観光客を接待する専門的な部門である。「杭州市観光客局」は杭州観光情報の発信を行い、英語のパンフレットを印刷して欧米各国に郵送した。『民国時期杭州市政府档案史料匯編』（1927－1949）[12]によると、「杭州市観光客局」は 2 年間に外国人観光客約 12,700 人を

接待した。また、1930 年代初期、杭州市役所は「杭州市観光事業研究委員会」を設立した。その後、この委員会は『新杭州導遊』（ガイドブック）を発行した。第二次世界大戦後には、杭州の観光業を回復させるために、杭州市役所は観光専用バスを運営し、旅館やレストランを建設した。1947 年に、杭州市役所は断橋の近くに杭州観光案内所を設立した。

貿易の繁栄と頻繁な商人の往来によって、杭州の茶屋、酒屋、飲食店、旅館のような産業が大きく発展した。『杭州市経済調査』（1931）[13] によると、当時杭州には茶屋が 555 軒あり、従業員は 1273 人であった。当時の資本金は 114,910 元で、年間売上は 662,855 元であった。酒屋は 617 軒あり、資本金は約 22.2 万元で、年間売上は約 151.7 万元であった。また、レストランが 80 軒あり、資本金は約 21.2 万元で、年間売上は約 109.7 万元であった。さらに、他の飲食店が 258 軒あり、資本金 6.7 万元で、売上は 57 万元であったと言われた。

また、鉄道の開通と杭州市内のインフラ整備によって、駅の近くに近代的な旅館が現れてきた。その後、西湖の周辺にも多くの高級旅館が築かれた。『杭州市経済調査』（1931）によると、当時杭州には旅館が 168 軒あり、従業員は 1528 人であった。基本金は 621,870 元で、年間売上は 838,750 元であったと言われた。

中華民国の時代の杭州観光業の発展につれて、西湖遊覧船も急速に発展し、その数と種類が増加した。1931 年では、西湖の遊覧船は 622 隻あり、従業員は約 1000 人であったと言われた。

また、19 世紀に杭州で写真撮影屋が現れたが、その後、20 世紀の 1920 年代になると、撮影が市民生活の一部分になった。特に、1929 年の西湖博覧会の期間中に、撮影業が非常に発展し、新しいスタイルの写真屋が多く開業された。西湖景勝区内にいくつの写真屋の支店が設立され、観光客に撮影サービスを提供した。西湖観光情報の発信と業務の拡張のために、各写真屋は西湖で撮った写真を葉書に印刷して土産品として販売し、またそれらの写真はガイドブックによく利用された。例えば、1928 年に二我軒写真屋は西湖の写真を 48 枚含む『西湖風景図説』を出版し、それはパンフレットとして各旅行社に利用された。同年に、各地の撮影家が協力し、西湖の写真を 36 枚選んで『銀色の西湖』を編集した。また、活仏写真屋が編集した『浙江西湖景』の売上も大きかった。さらに、1929 年に撮影家の舒新城（杭州人）は『西湖百景』を出版した。

杭州の手工業は以前から発達しており、中華民国の時代にさらに大きく発展した。シル

ク製品、張小泉鋏、舒蓮記扇子、孔凰春香粉などのような伝統的な手工業製品が継承され、そして、1929 年の西湖博覧会で表彰された。これらの特色ある商品は杭州に来る観光客が必ず買う土産品になり、杭州観光業の発展を促進した。

３．中華民国時代の杭州西湖の観光地化と観光空間

中華民国設立後、杭州の近代化も始まった。封建時代との最も大きな違いはインフラ・ストラクチャーの建設だと考えられる。特に、鉄路、市内道路の建設によって、近代交通網が現れ、交通手段が変わってきた。また、宿泊など関連施設も整備され、関連産業が大きく発展した。これらの整備は西湖博覧会の成功の要因の一つといえよう。そして、西湖博覧会の開催も杭州の観光対象と施設の整備を促進した。したがって、西湖博覧会は中華民国時代の杭州の最大の行事として、杭州の都市化と観光開発をかなり促進したと考えられる。

観光活動が頻繁になるにつれて、中華民国時代には杭州で最初の旅行会社が設立された。旅行会社は観光業という産業が形成された印と考えられる、つまり、観光が他目的のついでに行った行動から観光そのものを目的とする行動になり、産業化された。こうして、近代観光あるいは一般的な観光が現れた。図 9 が示しているように、中華民国時代の杭州西湖の観光空間が形成された。

淡野(2004)は一般的な観光地域の成立は三つの基本的な条件が必要であると指摘した。

１．観光対象となる資源的な基盤と、観光を受容する社会・経済的状況の存在。

２．観光開発を意図し、そのために必要な行動をとる主体の存在。

３．インフラ・ストラクチャーの存在と、観光化する地域における地理的慣性。

杭州西湖は近代以前の各時期の開発と整備を経て、中華民国時代に観光地としての条件が揃って、一般的な観光地になったと考えられる。また、当時杭州市観光局が外国人を接待するために設立されたが、西湖を観光地として観光情報を発信したことは初めてである。これも西湖の観光地化の印だと考えられる。

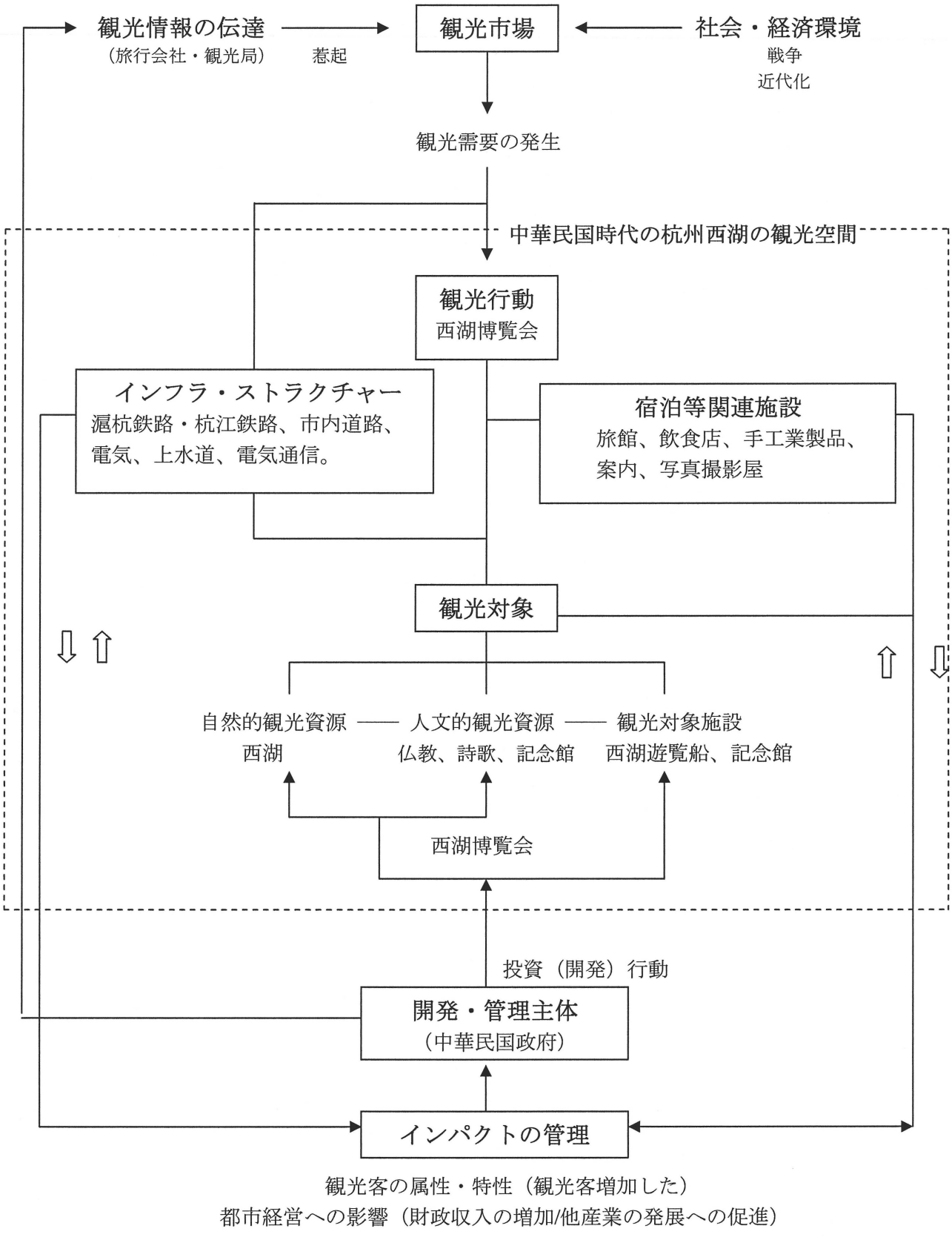


図９　中華民国時代の杭州西湖の観光空間

（淡野(2004)の図をベースにして作成）

Ⅴ　中華人民共和国設立後の杭州西湖の開発と観光

中華人民共和国が設立（1949 年）されてから改革開放[14]（1978 年）まで、西湖の観光は発展、停滞、回復という 3 つの段階を経た。改革開放後、経済の成長につれて、杭州西湖の観光は新しい時代を迎えた。以下、張（2011）をもとにして、中華人民共和国設立後、西湖に関する観光開発と観光活動をまとめ、現代の杭州西湖の観光特徴と観光空間を分析してみた。

１．改革開放前の杭州西湖の開発と観光

第一段階は 1949 年から 1965 年までで、西湖の観光が発展した時期である。1950 年に杭州市人民政府は『西湖景勝区管理条例』を公布し、その後、西湖を浚渫し始め、西湖景勝区内の道を改修し、蘇堤六橋を広げ、西湖の観光スポットを増築した。1953 年に『杭州市都市建設全体企画』が編集された。その中で杭州の都市機能が余暇と療養に結び付けられ、これによって、西湖の周辺に療養所が多く建設された。そして、1956 年に杭州市園林局が設立され、西湖景勝区を管理した。しかし、1958 年からの「大躍進」と自然災害[15]が重なった三年の困難期は西湖景勝区に衝撃を与えた。西湖景勝区内の土地と水域が野菜生産と家畜飼育などに転用されたので、汚染問題が出てきた。

第二段階は 1966 年から 1970 年までで、西湖の観光が停滞した時期である。「文化大革命」のために、杭州市政府と各部門の機能が全体的に麻痺した。西湖景勝区内の建築や文化財が多く破壊された。

第三段階は 1971 年から 1978 年までで、西湖の観光が回復した時期である。1971 年から、外交上の成果により外国の元首が来訪したことによって、杭州市政府は道路やホテルなどを整備し、西湖を浚渫した。そして、西湖の観光スポットも改築された。1976 年に杭州が中国の重点環境保護都市になった。同年に、中国政府は 200 万元を投資し、西湖の浚渫工事を行った。1976 年に「文化大革命」が終わり、その後、杭州の観光客数が急速に増加した。1978 年では、外国人観光客数は 5.3 万人で、国内観光客数は 600 万人であったと言われる。

２．改革開放後の杭州西湖の開発と観光

(1) 西湖景勝区に関する整備

改革開放後の杭州市政府の西湖に関する開発政策と施設整備を整理し、表1を作成した。表1によると、1980年代には、杭州市政府は西湖の姿を回復することを中心課題として、政策を作り、工事を行ったということが分かる。1990 年代には、西湖景勝区内の建設工事についての政策が実行され、それは西湖景勝区の管理と保護に役に立った。そして、21世紀になると、西湖の開発と保護が新しい時代に入ったと考えられる。2008 年までに、西湖総合保護工事[16]によって160ヶ所の自然と人文資源が修繕され、違反建築が58.5 万m^2撤去され、景勝区内の人口が 7021 人減少した。西湖の水面面積が 0.9 km^2拡大され、平均の深さが2.5mになり、水質も改善された。そして、2002年から杭州市政府は「還湖与民」という宗旨に基づいて、「無料西湖」[17]の理念を出した。現在まで、個別の観光スポットを除いて西湖景勝区は殆ど無料である。

表1　改革開放後西湖に関する開発政策と施設整備

1983 年	浙江省人民代表大会常務委員会は『西湖景勝区保護管理条例』を公布し、景勝区内の違反建築を撤去する。
1984 年	環湖緑地立退き建設所が設立され、環湖公園の建設を始める。
1986 年	西湖呼び水工程が完成。西湖の水量を管理することが可能となる
90 年代初期	中国茶博物館、中国シルク博物館、南宋官窯博物館、胡慶余堂中薬博物館などのような国家級の博物館が公開される。
1995 年	杭州市役所は西湖景勝区内の工事に対して、各関連部門の連合審議が必要であるという規定を定める。
2002 年	杭州市委、市政府は「西湖保護・遺産登録」を目標として、西湖総合保護工事を始める。そのために、「西湖景勝区管理委員会」が設立される。
2002 年	「西湖南線」観光ルート、雷峰塔と、万松書院が公開される。
2003 年	杭州市園文局に所属する六大博物館と記念館が無料で公開される。 西湖保護工事によって楊公堤、新湖濱、梅家塢茶文化村が整備される。
2004 年	「一街二館三園四墓五観光スポット」が公開される。

2005 年	両堤三島の修繕、龍井村及び龍井寺の整備、北山街の観光スポットの建設、西湖博物館の建設、韓美林芸術館の建設、霊隠寺入り口の修繕、西湖学研究院の設立などの工事が完成する。
2006 年	霊隠景勝区総合整備第一期、呉山景勝区総合整備第一期、「龍井八景」回復整備が完成する。
2007 年	霊隠景勝区総合整備第二期、呉山景勝区総合整備第二期、高麗寺回復、南宋官窯博物館増築第二期、八卦田遺跡保護、虎跑公園保護整備、虎跑路沿線及び満覚隴村整備が完成する。「印象西湖」が上演される。
2008 年	九溪－楊梅岭総合整備工事、杭州孔廟回復工事、玉皇山南総合保護工事、西湖夜景工事、呉山景勝区総合整備第三期、「塢梅春早」総合整備工事、南山「景中村」総合整備工事が完成する。
2009 年	「遺産登録」整備工事、玉皇山南総合保護工事第二期、「景中村」整備工事、六和塔総合保護整備が始まる。

（張（2011）、滕（2008）より作成）

表 2 は改革開放後の西湖と西湖総合保護工事に関する評価とマスコミによる宣伝である。西湖総合保護工事の整備によって、西湖の姿が回復され、西湖の価値も認められようになった。特に無料公開された後、観光客が非常に増加した。

表 2　西湖と西湖総合保護工事に関する評価とマスコミによる宣伝

1982 年	西湖が中国の第一期「国家重点景勝区」に指定される。
1983 年	杭州が中国の第一期「歴史文化名城」と「全国重点観光都市」に指定される。
1984 年	『杭州日報』会社と杭州市旅行本社は「西湖十景」選定活動を主催。
1985 年	「新西湖十景」が選定される。80 年代末に、西湖の景色が充実される。
1999 年	杭州西湖が世界遺産委員会に推薦され、「世界遺産暫定リスト」に登録される。
2000 年	西湖博覧会が回復される。
2004 年	西湖湖西総合保護工事は 2003 年の「中国十大建設科技成果賞」を獲得する。
2005 年	西湖景勝区が「中国観光客十大満足景勝区」と選ばれ、『中国国家地理』と 30 社のマスコミに中国の最も美しい五大湖の一つと評価される。

2006 年	西湖景勝区が中国第一期「文明景勝区」に選定される。
2007 年	西湖景勝区が中国の第一期「国家 AAAAA 級景勝区」に指定される。
2008 年	西湖湖西総合保護工事が国連に 2008 年国際人間住居環境改善の最も良い模範例賞として受賞される。

（張（2011）より作成）

(2) 観光業と関連産業の発展

改革開放後、杭州の観光が回復され、政府系あるいは民間の旅行会社が新たに設立されてきた。1979 年に、杭州サービス旅行会社、杭州市園林観光サービス会社が設立された。1980 年と 1981 年には、杭州第一汽車運輸会社観光部、杭州友誼観光サービス会社、杭州バスサービス会社が設立された。これらの 5 つの会社は総従業員 141 人で、バス 50 台を有していた。1981 年には観光客 92.5 万人がこうした旅行会社を利用した。1979 年から 1985 年までの間に、杭州市内の旅行会社は 70 社あり、1985 年には国内観光客 308 万人と海外観光客 2.4 万人に利用された。その後、旅行会社は増加傾向で、1996 年に中国国務院は「旅行社管理条例」を公布し、旅行会社を国際旅行会社と国内旅行会社に分けた。1997 年では杭州市内に国際旅行会社が 26 社あり、国内旅行会社は 142 社あった。その後、旅行会社が増加して 2008 年までに国際旅行会社は 41 社に、国内旅行会社は 396 社に増加した。

また、改革開放後、杭州政府による観光管理組織が設立され、杭州の観光事業を管理することとなった。その観光管理組織の変遷を表 3 に示した。表 3 のように、杭州市の観光管理組織は 20 年間で移り変わってきた。そして、2002 年までに、現在の杭州市の観光管理体制が形成されたと見られる。このように、西湖に対する管理と保護の制度が整えられてきたと考えられる。

表 3　杭州の観光管理組織の変遷

1983 年	杭州市人民政府は国際観光業務を経営し、杭州の観光事業を管理する「杭州市観光会社」を設立する。
1984 年	「杭州市観光会社」は杭州六通ホテル、延安招待所を管理し始める。友好、黄

	龍レストラン建設所、杭州観光バス会社を設立する。
同年	杭州飲食会社とサービス会社が合併され、「杭州市第二観光会社」が設立される。「杭州市第二観光会社」は国内観光業務を経営し、所属する飲食店とサービス企業を管理する。
1985 年	「杭州市観光会社」を「杭州市観光本社」と改称する。国際観光業務を拡大するために、「杭州市観光会社」は杭州飛達航空会社、杭州天馬クリーニング、中国杭州旅行会社を設立する。
1991 年	「杭州市観光事業管理局」が設立される。
1995 年	「杭州市観光事業管理局」を「杭州市観光局」と改称する。観光部門が杭州市政府に所属することとなる。
2001 年	「杭州市観光局」は「杭州市観光委員会」に変わる。「杭州市観光委員会」は杭州市政府が杭州の観光事業を管理するために作った政府部門である。
2002 年	西湖景勝区を世界遺産に登録させるために、杭州市政府は「杭州西湖景勝区委員会」を設立する。

（張（2011）より作成）

観光業の発展につれて、宿泊施設やレストランなどの観光関連産業も非常に発展してきた。1985 年に杭州市内には旅館は 388 軒あり、招待所（政府直営の旅館）は 379 所あった。その後、ビジネスホテルや高級ホテルが設立されてきた。2002 年では杭州市内の星ホテルは 108 軒となった。その後も増加傾向は続き、2008 年までに杭州市内の星ホテルは 247 軒に達した。

また、1990 年代後期から、杭州の飲食業は多彩な経営をしてきた。その規模は大きくなり、当時面積 1000 ㎡以上のレストランが 100 軒あった。その後、杭州で高、中、低各レベルのレストランが現れた。2002 年まで杭州市内のレストランは 17,000 軒に増えた。大規模レストランは継続して増加したが、それ以上に、小型レストランの増加が杭州飲食業の新しい特徴になった。

改革開放後、杭州市政府は杭州の手工芸術品と観光土産品の生産と販売を重視してきた。1984 年に観光土産品展示会が開催され、１万点以上の手工芸術品と観光土産品が展示された。同年に、杭州市観光土産品生産提供会社が設立された。その後、多くの展示会が開

催されたことによって、杭州の観光土産品が国内外に販売された。観光土産品は杭州の各ホテルやレストランに販売されただけでなく、外国人観光客を対象とした観光土産品専門店も現れた。2000 年以降、観光客が便利に買い物できるために、杭州市政府は観光商店街の建設を企画し、2005 年までに５つの観光客向けの商店街が建設された。

３．杭州西湖の観光の現状と特徴

(1)　「無料西湖」の観光政策と観光客数

21 世紀になってから、杭州市政府は西湖景勝区の観光発展の方式を摸索し始め、2002 年に「還湖与民、還緑与民」という目標を出した。西湖景勝区管理委員会は「還湖与民、還緑与民」の目標に基づいて、「無料西湖」という制度を施行し、西湖の環湖景勝区と総合整備後の新しい景勝区の一部を無料で観光客と市民に公開した。2002 年から順次無料で公開された景勝区を表 4 に示した。

表 4　2002 年から無料で公開された西湖景勝区と観光スポット

2002 年	総合整備後の「柳浪聞鶯」、長橋公園、児童公園、老年公園、中山公園などが無料で公開される。
2003 年	杭州市園文局に所属する六大博物館と記念館が無料で公開される。 「曲院風荷」、「花港観魚」、「杭州花圃」などが無料で公開される。
2004 年	西湖保護工事の中の 13 ヶ所の観光スポットが無料公開される。
2005 年	西湖博物館や韓美林芸術館などが無料で公開される。
2006 年	「龍井八景」と呉山伍公廟などの景勝区が無料で公開される。
2007 年	八卦田景勝区が無料で公開される。
2008 年	杭州孔廟、九溪煙樹公園、呉山阮公祠などの景勝区が無料で公開される。
2009 年	整備された太子湾公園が無料で公開される。
2010 年	江洋畈生態公園が無料で公開される。

（滕（2008）と胡（2011）より作成）

西湖景勝区が無料公開されて以降、観光客数は大幅に増加した。図 10 が示しているように 2001 年から 2010 年までの 10 年間で、杭州の観光客数は 2 倍ほど増加した。観光客の増加によって、観光収益も大きくなり、その観光関連産業の収益は、西湖景勝区の無料政策がもたらした入場料の損失をうめた。「無料西湖」の政策を実施した後、西湖景勝区の管理費が国家財政と西湖景勝区内の関連産業からの観光収益によって負担されることとなった。近年、このように、西湖景勝区は次第に良い循環を実現した。「無料西湖」の政策と国際化に応じて、図 11 が示しているように、2001 年から 2010 年まで、外国人観光客は 3 倍ほど増加したことが分かる。こうして、杭州の国際的知名度と競争力が大きくなり、観光国際化を推進することに対して影響を与えるだろう。

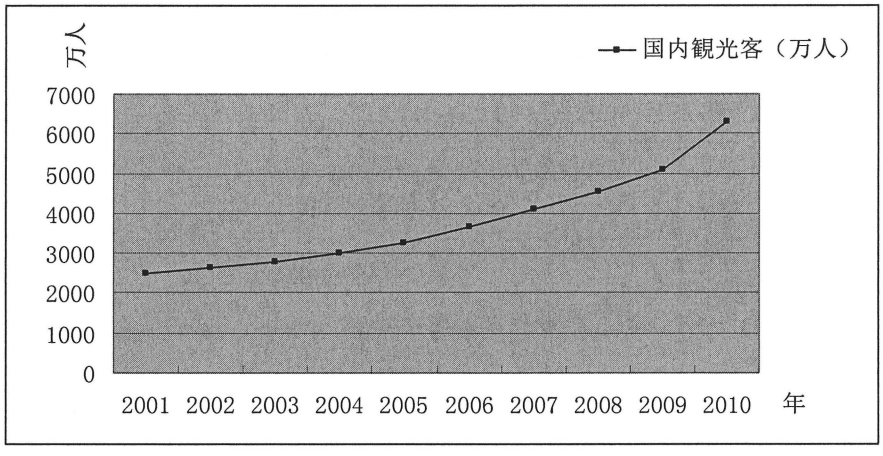


図 10　2001 年—2010 年の杭州を訪問した国内観光客数の推移
（杭州統計調査信息網ホームページの資料より作成）

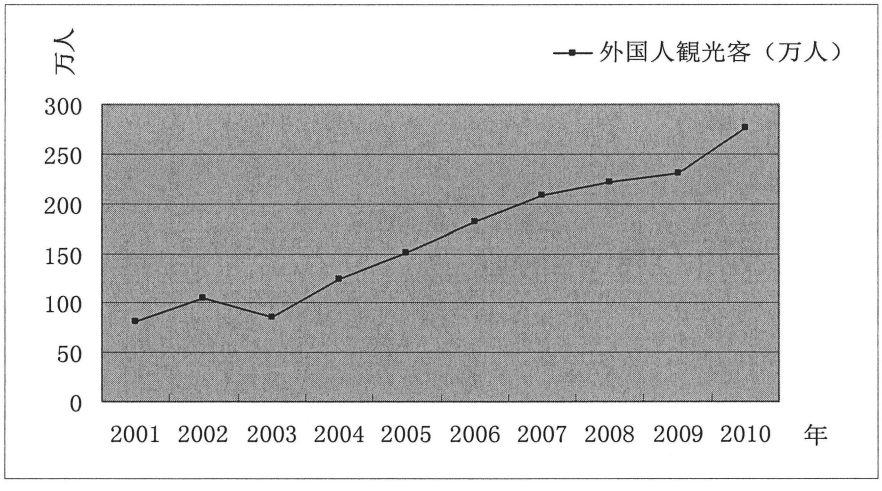


図 11　2001 年—2010 年の杭州を訪問した外国人観光客数の推移
（杭州統計調査信息網ホームページの資料より作成）

また、過去西湖の各観光スポットに来る観光客数は不均衡で、特に祝日やゴールデンウィークになると、人気観光スポットの観光客が多くなるので、観光地と管理に負担が大きかった。無料政策を実施した後、各観光スポットの客数のバランスを保ち、管理することが可能となった。このように、「無料西湖」の政策は大きな役割を果たしているといえるだろう。

しかし、「無料西湖」が実施された後、西湖景勝区の多くの部分が無料で公開され、24時間の観光が可能となり、市民と観光客が何回も来られるので、観光地としての魅力をどのように保つのかが、課題になるだろう。また、24 時間無料公開によって、景勝区の日常管理も難しくなり、その管理費用も大きな負担になることは杭州政府と西湖景勝区に新たな問題を与えた。

(2) 西湖景勝区の保護管理体制と効果

2002 年までは、西湖景勝区全体を統一して管理する有効な制度が見られなかった。この問題は長い間、西湖景勝区の管理と保存を制約していた。2002 年 9 月に、杭州市人民政府は杭州西湖景勝区、西湖区及び杭州之江国家観光地の管理制度を調整する政策を実施し、「杭州西湖景勝区管理委員会」を設立した。この委員会は杭州市政府の派遣組織として、西湖景勝区の管理・保護・計画・建設を行うこととなった。この委員会のメンバーは杭州市園林文化財管理局の職員でもあり、即ち、同委員会杭州市園林文化財管理局と共に西湖景勝区に対する統一的な管理を施行することとなった。

この管理制度の実施後、西湖に関する開発と管理が新しい段階に入った。杭州西湖景勝区管理委員会(2005)によると、以下の 3 つの成果が見られる。

一　西湖保護工事が強力に推進され、新しい観光ルートやスポットが数多く建設された。これらの保護工事は西湖の世界遺産への登録に必要な準備といえるだろう。

二　西湖景勝区の管理が整然として、観光地の持続的な発展を促進することになった。「無料西湖」の政策が実施された後、24 時間無料で公開されるので、西湖景勝区の管理がさらに難しくなった。この状況に対して、杭州西湖景勝区管理委員会は各種の管理資源を利用して 24 時間の管理行動を行った。

三　西湖景勝区の経済、社会、環境という三つの面の調和が取られ、景勝区内の良い循環が実現された。特に、梅家塢整備工事によって、村民の生活が改善されて、収入も増えた

ことだけでなく、梅家塢の生態と環境が良くなり、観光客を惹きつけることとなった。

2002 年から現在まで、「無料西湖」が 10 年間実施されていることに伴い、杭州西湖景勝区管理委員会は西湖に対する管理制度について常に模索し改善して、西湖景勝区の良い環境を維持し保護してきた。

(3) 西湖景勝区の交通管理体制

西湖景勝区内に居住する住民は約 2 万人である。景勝区内には自動車が 1188 台ある。道路の全長は 70.5km で、バス路線が 35 本ある。「無料政策」の実施後、観光客が大幅に増加しているため、西湖景勝区では交通問題が激しくなっている。杭州市交警支隊景勝区大隊（2005）によると、その交通状況には三つの季節ごと、曜日ごとの特性がある。

一　平日には、交通量が大きくないので、個別場所を除き、交通渋滞の問題がない。

二　春と秋の天気が良い土日曜日には、杭州市民と周辺都市の観光客の遊覧活動によって、主な景勝地区では交通量が増え、渋滞の現象が現れる。

三　10 月上旬のゴールデンウィークになると、全国各地の観光客が来るために、交通量が平日の５倍以上に増加する。景勝区のすべての道路の交通渋滞が厳しい状態になり、そして、それに伴い、駐車問題も出てくる。

春と秋の観光最盛期と祝日やゴールデンウィークには、交通問題が西湖の観光に不便を与え、観光の質もそれによって下がってくるだろう。その原因は、観光行動の増加と道路施設の立後れの矛盾、及び交通手段の構成の問題である。市内道路とは違い、景勝区内の道路については景勝区の自然環境的な制約によって、道幅を広げることや道路施設の増加などを通して交通渋滞の問題を解決することができない。また、西湖景勝区内の交通手段は定期バス、観光バス、タクシー、ワゴン車、セダン車、自転車などである。乗客数が多いバスに対して、タクシーやワゴン車、セダン車などは乗客が少なく、それらの自動車が大幅に増加していることが交通渋滞の主な原因だといえるだろう。それに伴い、駐車場の供給が需要に応じきれない現象が現れた。

それに対して、西湖道路管理部門は現状を分析し、解決方法を模索してみた。現在ではいくつかの措置を施行している。例えば、春と秋の土日曜日には、渋滞が発生しやすい場所では、一方通行などの交通方式を利用し、そして、非自動車道では一時駐車を許可する。こうして、一部分の渋滞状況を緩和することができる。また、ゴールデンウィークの交通

管理方式は平日、土日とは違い、さらに全面的な方法を採用する。まず、道路の標識を建設し、具体的な交通案内をつける。それから、西湖沿線一方通行を実施する。そして、景勝区外に乗り換えスポットを設置し、観光客が定期バスや観光バスに乗り換えて景勝区に入るという方法を利用して景勝区内に入る自動車を制限する。そうすると、景勝区内の交通量を減少させることとなる。

また、現在西湖景勝区では、自転車貸出サービスが提供されている。自転車貸出カードを作って、事前に使用料金をそのカードに入金する。貸出カードがあれば、西湖沿線の各自転車貸出スポットで自由に貸出・駐車・返却できる。その利用時間によって、料金を自動的にカードから差し引く。その貸出料金はあまり高くないため、杭州市民にも観光客にもよく利用されている。この自転車貸出サービスは景勝区内の交通問題に対する適切な解決方法の一つであろう。

これらの措置を実施したことによって、西湖景勝区の渋滞問題が部分的に解決されたが、どのように合理的な交通管理を実現するかは、観光客が年々増加している西湖景勝区が直面している課題であるといえる。それに対して、西湖景勝区道路交通管理部門は他の方法も検討している。例えば、西湖景勝区内では定期バスや船などの乗り物の乗り放題というサービスを提供すること、または、景勝区内の私用車の利用料金を増加させて利用の制限という目的を達することなどである。

(4) 杭州西湖の観光の特徴と観光形態

杭州西湖の観光の特徴と形態を捉えるために、観光客を対象とした調査を基にして考察したい。浙江省の国内観光の現状を把握するために、浙江省観光局は2000年の4月から10月までの間に浙江省内の11の都市で国内観光状況についてサンプリング調査を行った。この調査は浙江省の各都市の一部のホテル、旅館、観光地において観光客を対象としたもので、浙江省各都市での滞在日数、観光回数、平均消費額、観光に対する満足度などの項目を含む調査である。杭州市における2000年の調査のサンプル数は市内の10630人で、その中で観光地(西湖を含む)でのサンプルは4342人である。

この調査結果をまとめた浙江省観光局(2000)のデータを利用して以下の図を作成した。図12は杭州に来た観光客が杭州の各観光資源の何に興味を持っているかを比較した図である。図12によると、杭州の景色について興味を持っている人が最も多く、88%を占め

ている。次に、文化財と遺跡について興味を持っている人は 60%を占めている。即ち、杭州の美しい景色を見ることや、文化財と遺跡を訪問することなどが杭州での主な観光行動であろう。

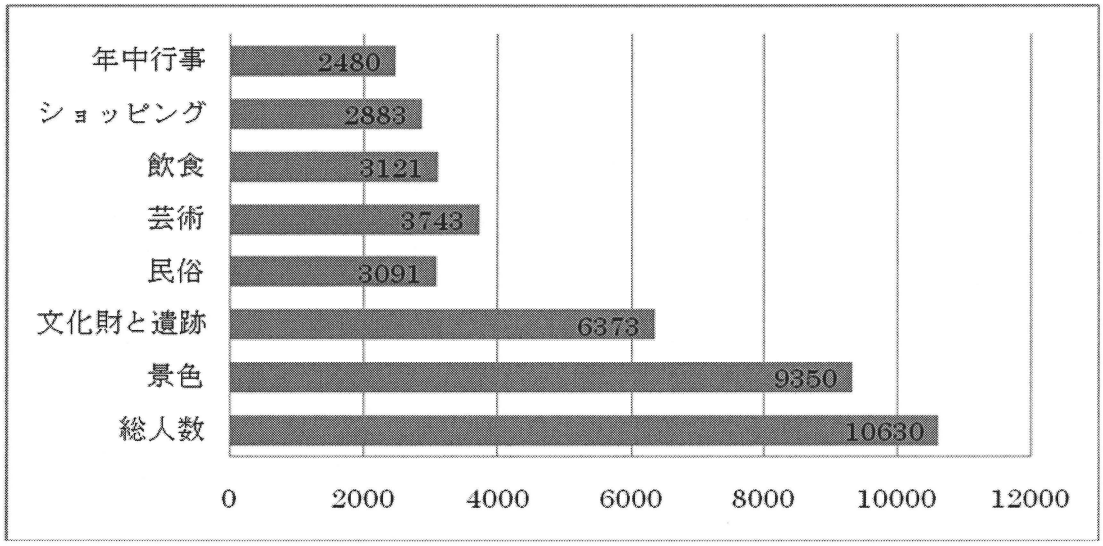


図 12　観光客が杭州の各観光資源に対して興味を持っている点の比較
(浙江省観光局(2000)より作成)

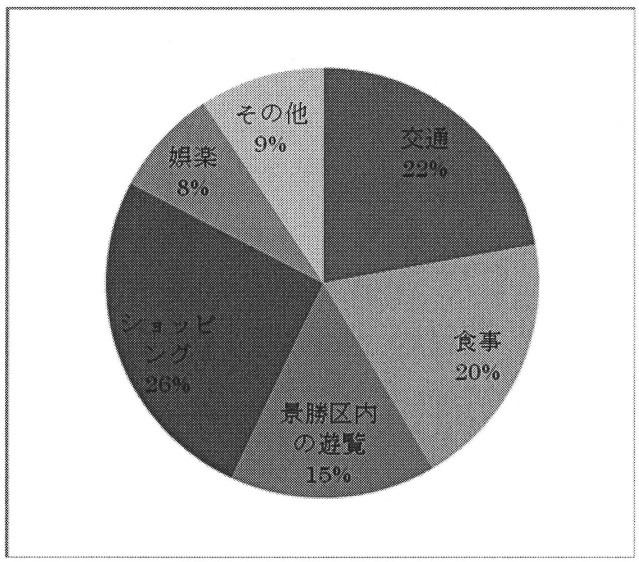


図 13　杭州における観光客の目的別消費状況の割合
(浙江省観光局(2000)より作成)

図 13 は杭州における観光客の消費状況を示しており、杭州ではショッピングのための消費が最も高くて 26%を占めている。その次は交通の消費と食事の消費であり、22%と20%を占めている。景勝区内の遊覧に関する消費は 15%を占めており、2000 年では「無

料政策」はまだ実施されてなかったので、景勝区内の遊覧に関する消費はチケットの購入に用いられたと考えられる。そして、浙江省観光局(2000)によると、日帰り観光客の一人当たりの消費額は260元で、宿泊観光客の一人当たりの消費額は900元である。

図14は杭州における省内観光客数と省外観光客数の割合を示しており、杭州を訪れた客は主に省外の観光客であるということが分かる。図15は杭州における個人観光と団体観光の割合を示している。団体観光の割合は4分の1のみであるため、個人的な観光行動または家族・親友との同伴観光が杭州の観光の主要な形態であると言えるだろう。図16は杭州における観光回数の割合を示しており、60%以上の観光客はリピーターで、その中の3分の1は4回以上来ている。杭州の観光のリピーター率が高いということが分かる。

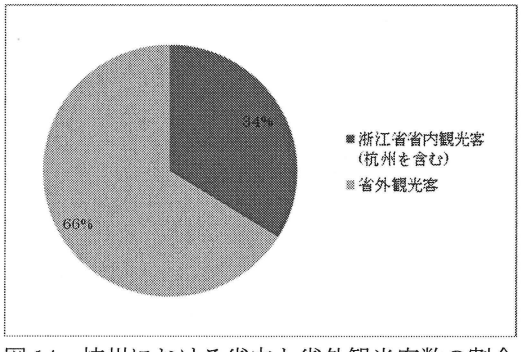


図14　杭州における省内と省外観光客数の割合
(浙江省観光局(2000)より作成)

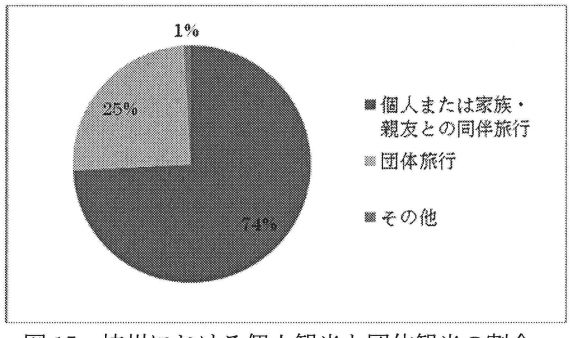


図15　杭州における個人観光と団体観光の割合
(浙江省観光局(2000)より作成)

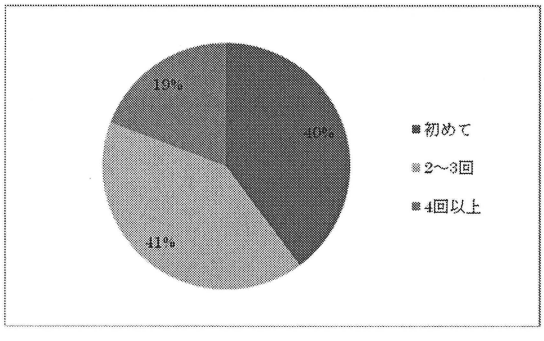


図16　杭州における観光回数の割合
(浙江省観光局(2000)より作成)

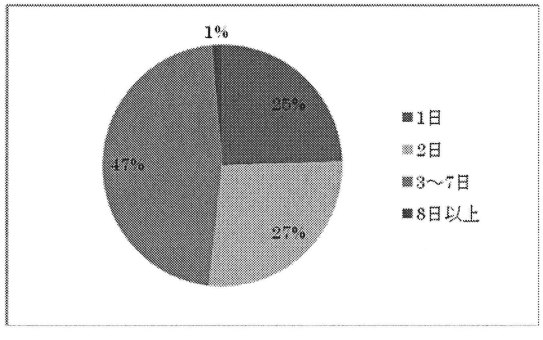


図17　杭州における滞在期間の割合
(浙江省観光局(2000)より作成)

図17は杭州における滞在期間の割合を示している。1日と2日の割合が全対象者の約半分で、3～7日の割合が4割から5割ということが分かる。したがって、杭州での観光活動は主に一週間以内であると言える。また、日帰りの観光客数の割合は約25%のみであるから、即ち、宿泊の観光客が多いということが分かるだろう。そして、浙江省観光局(2000)によると、杭州での平均滞在期間は2.3日である。このように、宿泊型の観光とい

うことは杭州の観光の特徴の一つであろう。

以上の浙江省国民観光状況調査は各都市の観光状況を把握するために行われた調査なので、杭州に関する調査は杭州の色々な場所で行われた。杭州市を訪れる観光客のほとんどは西湖を訪問していると見なされるが、浙江省国民観光状況調査の報告書では西湖のみに関する具体的なデータが示されていなかった。そのため、2012 年 9 月に筆者が杭州西湖で行った西湖に来た観光客 100 人を対象としたアンケート調査の結果を合わせて、杭州西湖の観光特徴と形態を分析してみたい。

図 18 は観光客が西湖に対して興味を持っている点の比較である。100 人の回答者の中では、70 人は西湖の美しい景色に対して興味を持っているということがわかる。この結果は、図 12 が示している観光客が杭州の各観光資源に対して興味を持っている点の比較の結果と同様に、美しい景色が杭州の観光地の特徴として、集客のポイントであることを示している。すでに述べたように、古代の西湖遊覧は船に乗って、美しい景色を観賞することであった。長い歴史の変遷の中でも、景色を見ることは西湖遊覧の基本方式として、変わらないのみならず、常に一つの文化としてとらえられてきた。したがって、西湖が杭州の名刺になり、杭州に来る観光客にとって、まず西湖の景色を見ようという意識が形成されてきた。

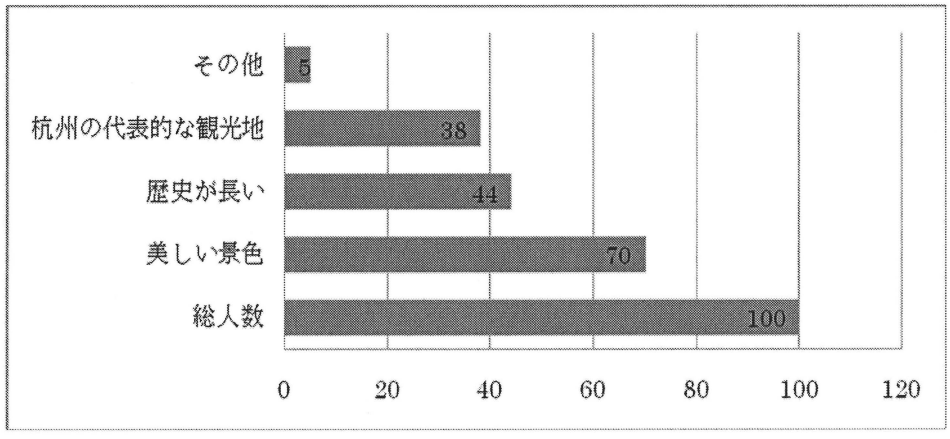


図 18　観光客が西湖に対して興味を持っている点の比較
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

図 19 は杭州における観光客の消費額を示しており、1000 元～2000 元と 2000 元以上を消費する観光客の割合が最も多く、合計で 67%を占めている。1000 元以下を消費する観光客の割合は合計で 33%である。図 14 は杭州西湖における省内観光客数と省外観光客数

の割合である。図 20 を図 14 と合わせてみると、両方の調査結果は類似しており、杭州と西湖に来る観光客の 3 分の 1 は浙江省内の人であると分かる。そして、図 14 によると、省内の観光客の中では、杭州市民の割合が半分以上を占めていると見られる。2002 年以降「無料西湖」が実施されてきたから、杭州市民に対して、西湖は観光地ではなく、公園のような日常のレジャー施設になってきた。つまり、無料公開されていることに伴い、杭州市民に対する西湖の観光地としての属性も変化してきたと考えられる。

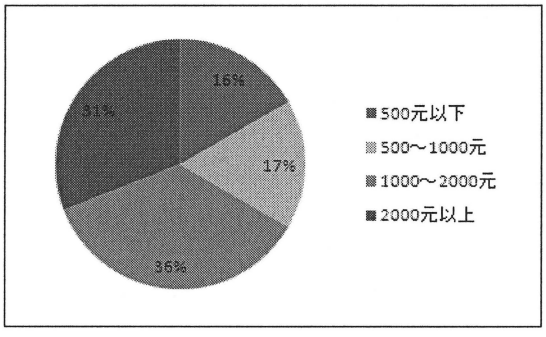


図 19　杭州における観光客の消費額の割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

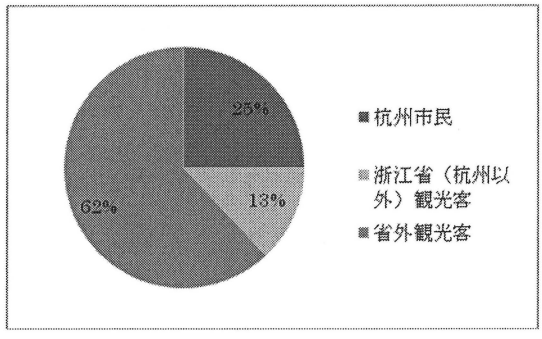


図 20　西湖における省内と省外観光客数の割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

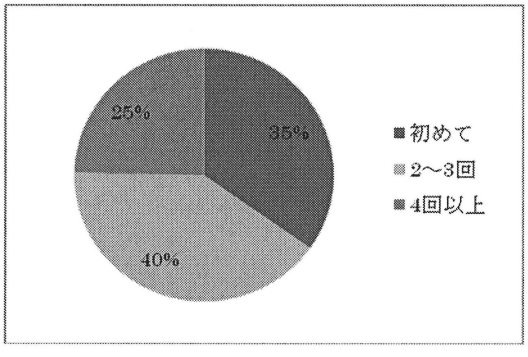


図 21　杭州西湖における観光回数の割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

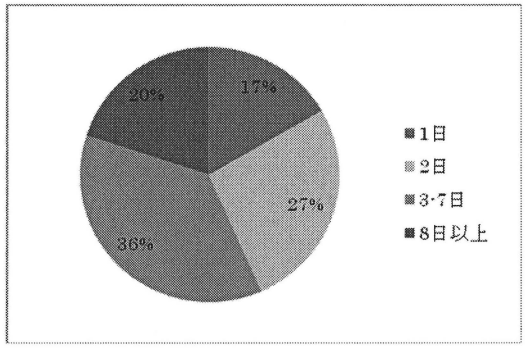


図 22　杭州市における滞在期間の割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

図 21 は杭州西湖における観光回数の割合を示している。図 16 と同様に、杭州と西湖に来る観光客の観光回数は 1～3 回が多く、その中で、2～3 回が最も多いと分かる。そして、4 回以上の割合も約 25%を占めている。このリピーター数が多いことから、西湖は観光客に対して魅力がある観光地だと考えられるだろう。図 22 は杭州市における滞在期間の割合である。図 17 によると、宿泊型の観光は杭州の観光の特徴であるということがわかるが、それと同様に、西湖での観光は主に一週間以内の滞在型の観光である。

以上分析したことによって、杭州と西湖に来る観光客は全体的に省外の人が多いが、リ

ピーター率が高く、平均滞在期間が約２～３日であることから、観光地としての魅力も高い。なぜ杭州西湖がこのような魅力を持っているのかというと、図 12 が示しているように、観光客が杭州の観光資源として最も興味があるのは景色である。筆者が西湖を訪問した時にも、水辺に長時間座って景色を見ている観光客が多く見られた。観光ということはそもそも美しい、または珍しい景色を見ることであろう。西湖が無料公開されたことによって、24 時間の遊覧ができるようになり、西湖での観光がゆっくり時間をかけるものという感じが出てきて、レジャー施設に変化してきた。都市にある観光地は市民のレジャー空間にも属するといえるのではないか。これも都市観光地の特徴の一つであろう。つまり、杭州西湖は杭州市民に対するレジャーの施設であり、省外の観光客に対しては再び来ることを促す魅力を持っている宿泊型の観光地であろう。

また、筆者によるアンケートの自由記入の項目でいろいろな意見やアドバイスも現れた。良いと思う点は西湖の美しい景色ときれいな環境、歴史や文化の蓄積を感じて満足すること、「通行者優先」の交通規則があるから温かさを感じること、地元民として幸せで、理想的な生活都市と思うことなどである。良くない点は物価がやや高くて偽物も見られることや、飲食店とトイレが少ないこと、土日曜日には観光客が多いことなどである。その他は、環境保護を心配し、人工的な宣伝や娯楽施設、交通渋滞の改善を期待する答えもある。これらの意見の中でみられた土日曜日の観光客の増加による交通問題に対しては関係部門はこれまで適切な解決方法を実験しているところであるが、根本的解決のためには、観光客や市民による協力の意識と秩序ある観光行動が求められるであろう。また、観光記念品の販売の規範化やトイレの配置問題などは確かに改善を望みたい。

４．現代の杭州西湖の観光空間

中華人民共和国設立後、特に改革開放以降、杭州西湖に関する観光開発と整備は新しい時代に入った。杭州市政府は西湖総合保護工事を行い、西湖の姿を回復し、新しい観光スポットを建設した。その後、杭州西湖に関する全面的な管理組織である西湖景勝区管理委員会が設立された。2002 年から、新しい集客手段として、杭州市政府は「無料西湖」政策を実施し、現在西湖の殆どの観光スポットが 24 時間に無料で公開されている。この政策の実施後、観光客の増加と伴い、西湖は杭州市民のレジャー施設にも変化してきた。西湖景勝区の観光空間が杭州の都市生活空間と重なっていると考えられる。

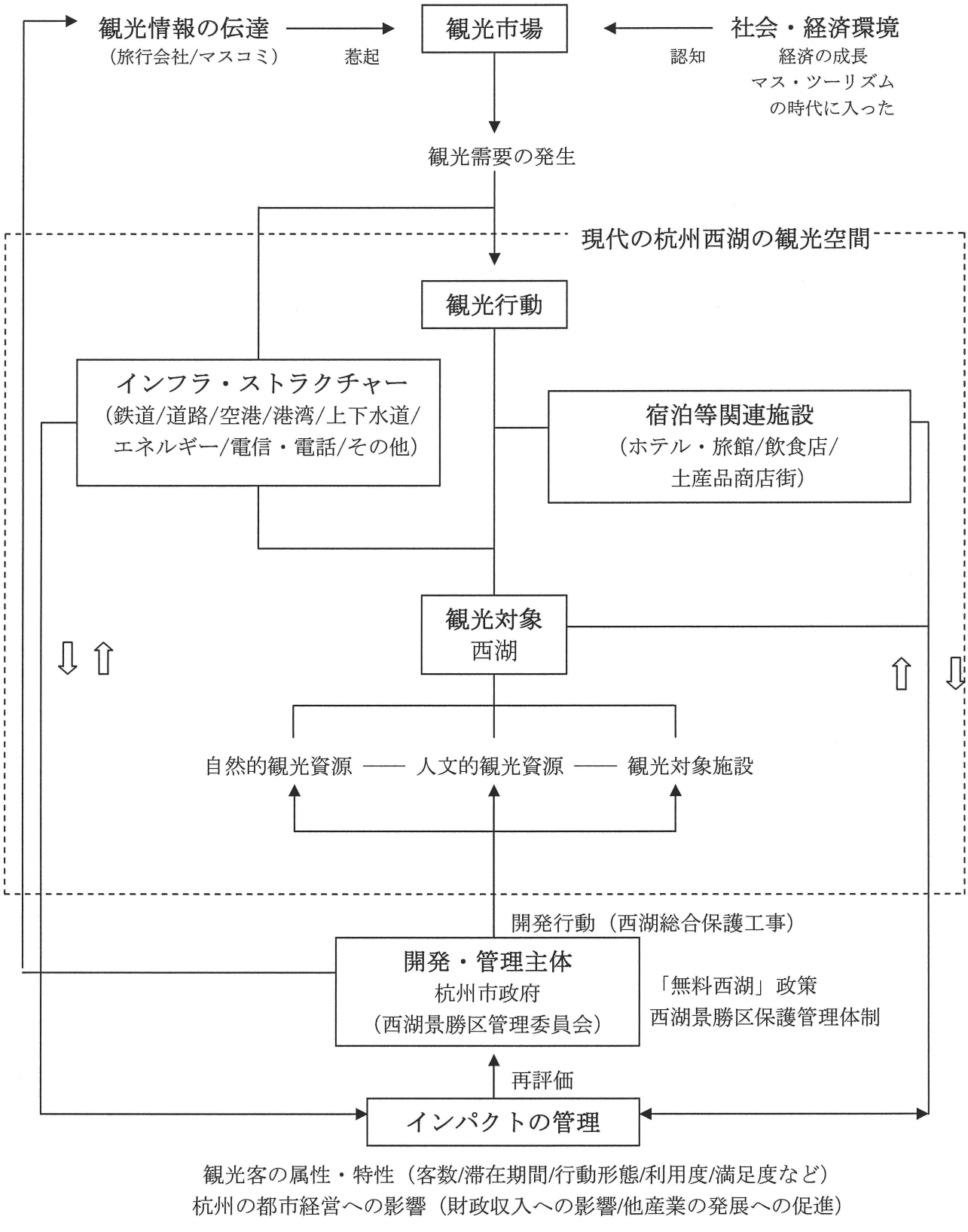


図 23　現代の杭州西湖の観光空間
（淡野(2004)の図をベースにして作成）

また、改革開放後、現代化建設が始まり、中華民国時代のインフラ整備を基にして鉄路や空路、電話などのインフラ・ストラクチャーが充実されてきた。そして、観光業の発展につれて宿泊施設やレストランなどの観光関連産業も非常に発展した。図 23 が示しているように、杭州西湖の観光空間が中華民国時代により非常に発展した。

さらに、改革開放後、経済の発展で中国人の生活が豊かになり、大衆的な観光ができるようになった。そして、マスコミなどによって観光情報を伝達し、中国は旅行会社をよく利用するマス・ツーリズムの時代に入った。そこで、観光需要が多く発生した。これは杭州西湖の観光空間の発展を促進した社会・経済的な要因であろう。

杭州西湖の観光空間の形成につれて、インパクトの管理の必要性がみられるようになった。本章の第 3 節では杭州西湖の観光客数の変化、滞在期間、観光特徴などを詳しく分析した。杭州西湖は杭州市民に対するレジャーの施設であり、省外の観光客に対しては再び来ることを促す魅力を持っている宿泊型の観光地であるということがわかる。

Ⅵ　世界遺産登録後の杭州西湖の観光

１．世界遺産登録に関するアンケート調査の内容と分析

1999 年に杭州西湖が世界遺産委員会に推薦され、「世界遺産暫定リスト」に登録された。その後、杭州市政府は 10 年間をかけて西湖総合保護工事を行った。そして、2011 年 6 月に、杭州西湖は文化的景観が評価され、世界文化遺産に登録された。世界遺産登録後、杭州西湖は観光客の急増と遺産保護の間にどのようにバランスを取るのかという課題に直面した。遺産保護は政府だけの責任ではなく、その目的のためには一般市民の力も必要であろう。そこで、中国人観光客は世界遺産をどれくらい知っているのか、どんな意識を持っているのか等を直接に調べてみることにした。そのため、筆者は杭州西湖で世界遺産への意識などに関するアンケート調査を行った。以下のように調査の結果をまとめてみた。

アンケート調査の対象は西湖に来た観光客 100 人で、世界遺産への意識についての項目の回答率は 98%である。図 24 は観光客が西湖の世界遺産登録とその影響についてどう思うかを示している。誇りを感じる人はかなり多く、その割合は 54%である。世界遺産登録の影響については、周辺の関連産業と杭州の観光の発展を促進する、また登録後の西湖はきれいで美しい観光地になると思う人の割合も高くて 47%と 46%を占めている。しかし、世界遺産の登録が西湖に来る観光客の増加と西湖の知名度が高くなることにつながると思う人の割合はわずか 29%である。そして、アンケートの自由記入の項目で、世界遺

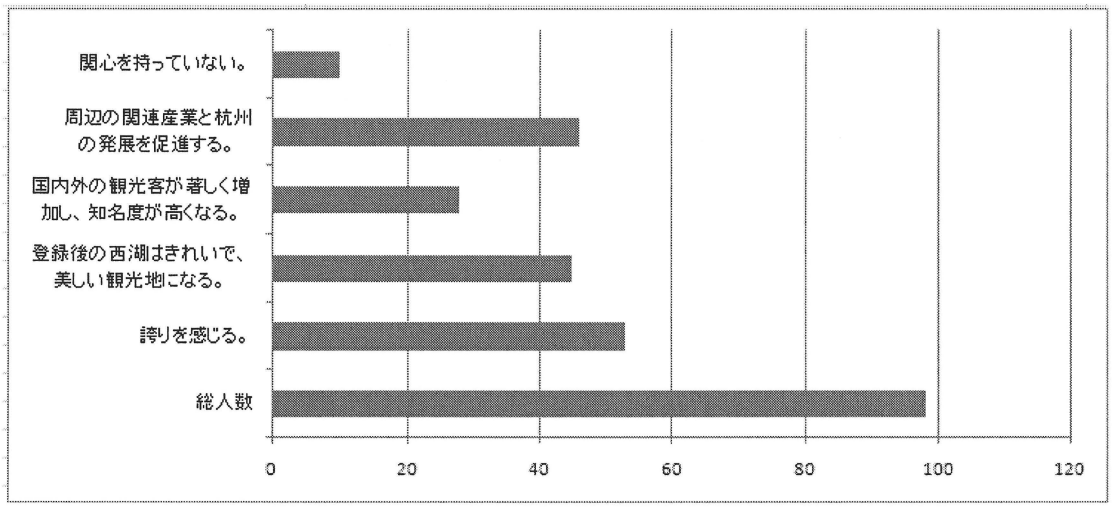


図 24　観光客が西湖の世界遺産登録とその影響について思うことの比較
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

産の宣伝と市民の環境保護の意識を期待する人も少なくない。したがって、現在の中国では、世界遺産という言葉を環境・保護と関連して考えている人が多いということがわかる。

図 25 から図 28 を見ると、世界遺産への認知度と関心度が理解できる。図 26 は西湖が世界遺産に登録されたことを知っているか否かの割合を示しており、西湖に来た観光客の中で約 70%の人が知っている。そして、アンケート調査内の「西湖に関する感想」という自由記入の項目では、西湖の環境問題に関心を持っている人がみられ、市民の保護意識を喚起することは遺産登録の目的の一つであり、西湖の環境保全はみんなの行動に依存するというような考え方もある。淡野（2008）は「物見遊山」の対象として世界遺産を観光と関連させるのではなく、世界遺産のもつ価値を人々が実際に目にすることによって理解するならば、その保護・保全の重要性を認識するだろうと指摘した。西湖の世界遺産への登録についてはすべて政府が取り組んでいたが、登録後の世界遺産の保護には一般市民は重要な力になると考えられる。観光客の世界遺産への保護意識はその市民の力の源であろう。特に、西湖が地元杭州市民のレジャー施設に変化していくことによって、杭州市民にとって日常生活に属する西湖に関する保護は自分たちの生活空間を守ることにもなる。したがって、杭州市民の保護意識の喚起と養成は西湖保護の無形の力となるものであり、今後の課題になるだろう。つまり、政府を主体として、市民や観光業界関係者の力を合わせて、観光開発と遺産保護の役割を分担することによって、西湖の持続可能な観光を推進することが期待できるだろう。

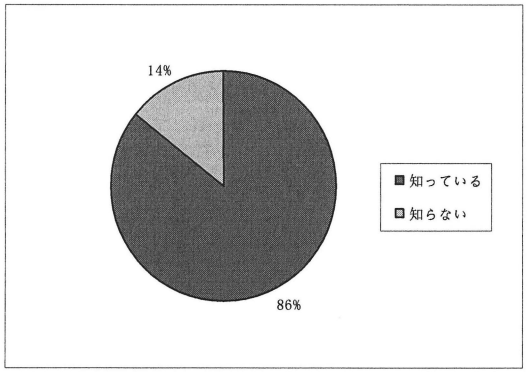


図 25　世界遺産を知っているか否かの割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

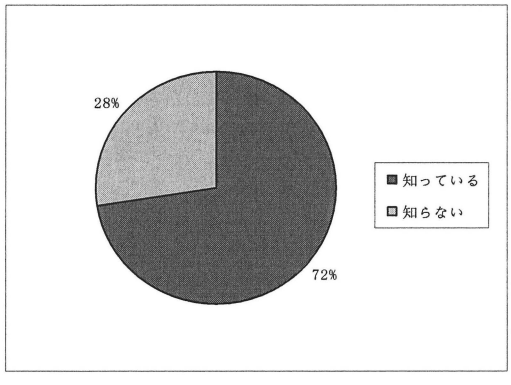


図 26　西湖が世界遺産に登録されたことを知っているか否かの割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

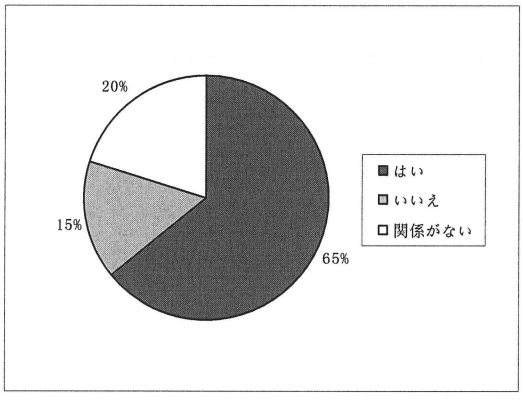


図 27　世界遺産が観光地に行く理由になるか否かの割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

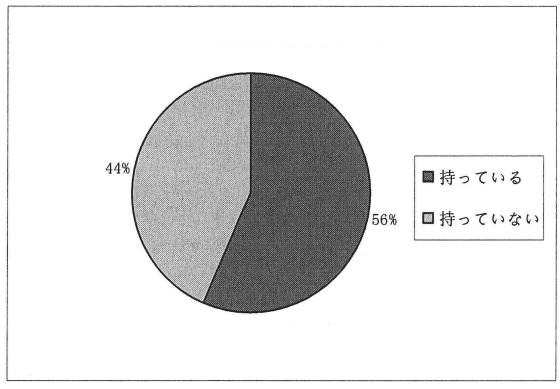


図 28　世界遺産の登録と保護について関心を持っているか否かの割合
（筆者のアンケート調査の結果より作成）

図 27 は世界遺産が観光地に行く理由になるか否かの割合を示しており、65%の人は世界遺産への登録は観光地にいく理由になると答えている。日本では、世界遺産はすでに観光地の集客の手段になり、旅行会社にもよく利用されている。それは経済的な目的のためであるが、客観的にみても世界遺産への認識は広く普及しており、世界遺産への登録と保護についての関心も高まっているといえよう。中国では世界遺産としての観光地は多いが、世界遺産に関する宣伝が少なく、経済的な目的に利用される例も殆どない。世界遺産登録の目的は人類の自然や文化遺産をよく保存することである。だが、それらの世界遺産も同時に観光地であり、観光客が増加することは観光地が望むことだろう。観光客が増加すると世界遺産の保全は必ず難しくなるので、世界遺産と観光地の間には矛盾が存在する。その矛盾を根本的に解決することは困難かもしれないが、観光客に世界遺産への保護意識を高めてもらうことはその矛盾を緩和する方法の一つだと考えられる。

図 25 を図 28 と比較すると、世界遺産を知る人の割合よりも世界遺産の登録と保護について関心を持っている人の割合が 30%低いことが分かる。つまり、世界遺産への認知度と関心度を高めることは今後の世界遺産の保護に関する課題の一つになるのではないか。したがって、世界遺産への登録は終点ではなく、登録後の遺産を保護し、世界遺産である観光地の持続性を保ち、遺産保護と観光推進の間のバランスを取ることが現在杭州西湖が直面している課題である。一般市民が世界遺産への関心度を高め、実際の行動力を向上させることはそれらの問題を解決する方法の一つだと考えられる。

２．世界遺産の保護と観光地の持続性

ユネスコは 1978 年から世界的な価値をもつ文化財や自然を保護するために世界遺産への登録を開始した。世界遺産登録の目的の一つに、文化的観光を促進することがある。多数の人々が世界遺産を見ることにより、世界遺産の価値とその保護の重要性を認識することは重要である。遺産の保護・保全に対する負の要素として観光を捉えるのみではなく、遺産の存在を観光産業が促進するという認識もある（淡野 2008）。したがって、遺産保護と観光推進の間には、対立の面も統一の面もあるわけであろう。前に述べたように、観光推進と観光客の増加によって、世界遺産観光地の管理と保護が難しくなる。これは遺産保護と観光推進の対立の面であるが、観光政策を作って観光客数を制限する、または地元民と観光客の保護意識を高めることなどもその対立を解決する方法だろう。遺産保護と観光推進の間に存在した各対立の面については必ず解決・統一できる方法があると考えられる。

2001 年の世界遺産委員会では観光が世界遺産に与える影響についてすでに認識され、「世界遺産を守る持続可能な観光計画」が策定された。この計画の目的は、世界遺産の価値を保護し、かつ、観光による脅威を減らすために、世界遺産委員会や遺産保有国の管理担当者をサポートしていくことにある。計画では以下の七つのガイドラインが設定された（ペダーセン 2008）。

① 観光に対処できるだけの管理能力をつける。

② 遺産地域の人々が観光業界に参加し、メリットを享受する。

③ 世界遺産周辺地域の商品を市場に出す手助けをする。

④ 保護教育を通じて世界遺産に対する誇りを喚起する。

⑤ 観光収益をこれまで不十分だった遺産の保存・保護費用にあてる。

⑥ ほかの世界遺産や保護地域での経験を共有する。

⑦ 世界遺産保護について観光業界関係者の意識を高める。

この七つのガイドラインは世界遺産としての観光地が持続可能な発展を推進する道を指し示す。世界遺産としての杭州西湖は④、⑥、⑦という三つの点では足りないと見られる。実は西湖だけでなく、現在の中国の世界遺産観光地はこの三つの点、あるいはさらに多くの点では足りないといえよう。

改革開放後の中国は経済が速く成長し、観光という活動も多くの人ができるようになり、

年々拡大しており、マス・ツーリズムの時代に入ると言えるだろう。現在の多くの先進国はすでにマス・ツーリズムの時代を乗り越え、エコ・グリーンツーリズムの時代に推移しており、環境への配慮を観光行動と関連づけている。中国もいずれこうした時代に入るため、現在の先進国が積極的に推進しているエコ・グリーンツーリズムについての研究と実際に発生した問題は中国のような発展途上国にとって、非常に参考にする価値があると考えられる。

淡野（2008）は国内外の世界遺産を訪れることを商品として販売しているパック型ツアーの資料に基づいて日本の世界遺産の商品化の実態を分析した。これらの商品のセールス・ポイントが「低廉な費用と短い日程で多くの観光地を巡る」というものであるために、世界遺産がもつ歴史的、文化的、芸術的、建築的などの価値を時間をかけて理解するという余裕はない。世界遺産の保護・保全に当たっては、多くの人々にその存在を実際に見てもらう必要があるが、単に大衆観光の受け皿として位置づけられている実態がとらえられる（淡野 2008）。商品化によって、世界遺産が商品として販売されることを避けることができないなら、その現実を受け入れて世界遺産のブームを利用して世界遺産観光地の文化的観光の質を向上することや、国民の遺産意識の養成と遺産保護・保全への関心度を高めることなどを考えるべきだろう。現在の中国では、世界遺産の商品化はまだ見られないが、もしその現象が現れたら、必ずしも悪いことではないと考えられる。旅行会社は「世界遺産」をセールス・ポイントとして販売する前提があるはずである。それは、「世界遺産」が観光客にとって魅力があり、好奇心を引き付けられるということであろう。即ち、世界遺産の商品化がないことはある意味で中国人の「世界遺産」への関心度の低さを示している。

また、淡野（2008）は観光政策審議会が示した観光の意義と世界遺産との関連性を表5にようにまとめた。観光の意義の4項目は世界遺産との関連があるので、観光活動を通じて世界遺産への関心度を高めることや世界遺産への保護・保全行動を推進することなども実現できるだろう。世界遺産と観光の間に、共通点があるので相互的な促進作用が見られる。

表５　観光の意義に関するキーセンテンスと世界遺産登録の意義との関連

カテゴリー	観光の意義に関するキーセンテンス (観光政策審議会(2006)答申による観光の意義	世界遺産登録の意義との関連
A	①　人々にとっては、ゆとりとうるおいのある生活に寄与し、地域の歴史や文化を学ぶ機会を提供する。	・世界遺産の歴史的、文化的、芸術的などの価値を理解し、遺産の保護・保全の重要さを知り、後世に継承する。
B	②　地域にとっては、魅力ある地域づくりを通じ、住民の誇りと生きがいの基盤の形成に寄与する。	・地域において世界遺産が存在することの重要さを知り、遺産の保護・保全を通じて、地域の協働を図り、地域の魅力を高める。
C	③　国際社会にとっては、国際相互理解の増進、国際平和へと貢献する。	・世界遺産を人類共通の財産として認識し、世界的な連帯および支援を増進する。
D	④　国民経済にとっては、大きな経済効果を有している。	・世界遺産の見学を通しての金銭的消費により、世界遺産の保護・保全に必要な財政的支援をする。 ・観光消費による経済効果により、豊かな暮らしを実現し、地域の自然環境、伝統的な遺物や文化の適正な保持に配分する。

（淡野（2008）より引用）

Ⅶ　結論

本論文では、杭州西湖の観光地化の過程と観光空間の形成、および世界遺産登録後の課題について述べてきた。その結果を以下まとめて述べる。本論文では淡野（2004）のモデル図を適用して、杭州西湖の観光空間の時代ごとの変化を把握しようと試みた。それらの図（図 5～9 と図 23）を比較して、その特徴と違いをまとめたのが表 6 である。

時代ごとにみていくと、近代以前（隋唐時代から清代まで）には、各時代の開発と整備を経て、自然と人文的な観光資源を持っている杭州西湖は観光の対象になり、文人墨客の詩歌によって観光情報が伝達され、各時代の代表的な観光行動が現れてきた。観光行動が増加したことにつれて、近代以前の西湖観光の主な遊覧施設としての西湖遊覧船が発展し、宿泊施設や飲食店も多く見られるようになった。こうして、観光地になる条件がそろって、観光の空間も次第に形成されてきた。即ち、近代以前は杭州西湖が観光地になる準備段階として、観光情報の伝達、観光資源の創出があり、観光行動、開発行動と関連施設が少しずつ発展してきた。各時代の整備による歴史と文化的蓄積が近代以前の杭州西湖の観光空間の最大の特徴であった（表 6）。

中華民国の時代に入ってから、近代化を背景として、旅行会社が設立され、観光業という新しい産業が現れた。そして、インフラ整備の近代化も中華民国時代の杭州西湖の観光空間変化の特徴の一つである。近代観光が現れた中華民国の時代には、杭州西湖は観光地としての条件が成熟し、一般的な観光地になったと言えるだろう（表 6）。

その後、中華人民共和国政府は改革開放の政策を実施し、西湖景勝区に関する管理と保護を行って、西湖の景観が回復された。21 世紀になると、杭州市政府は西湖総合保護工事を開始し、西湖の開発と保護が新しい時代に入った。経済の成長でマス・ツーリズムの時代に入り、観光客が年々大きく増加しており、観光業と関連産業も非常に発展している。そして、2002 年に西湖景勝区管理委員会は「無料西湖」という制度を施行し、西湖景勝区の一部を無料で観光客と市民に公開した。現在まで、個別の観光スポットを除いて西湖景勝区は殆ど無料である。無料公開されて以降、観光客数が 2 倍ほど大幅に増加したことによって、膨大な客に対する管理方法は西湖景勝区の大きな課題となった。それと同時に、交通などの問題も出てきた。また、浙江省観光局(2000)の調査データと筆者のアンケート調査による分析結果によると、西湖景勝区は杭州市民に対するレジャーの施設であり、省外の観光客に対しては再び来ることを促す魅力を持っている宿泊型の観光地である。

表6　杭州西湖の観光空間を構成する要素の変化

観光空間の各要素			近代以前				近代	現代	将来
			隋唐	宋	明	清	中華民国	中華人民共和国	
観光市場	観光情報		詩歌	詩歌	詩歌 文学 絵画	詩歌 文学 絵画	詩歌 旅行会社 観光局	詩歌 旅行会社 マスコミ	詩歌 旅行会社 マスコミ
	社会経済環境		―	仏教(北宋) 観光流行 (南宋)	―	―	戦争、 近代化	経済の成長 マス・ ツーリズム 時代	マス・ ツーリズム 時代以降 エコ・ ツーリズム 時代？
杭州西湖の観光空間	観光対象	自然	西湖	西湖	西湖	西湖	西湖	西湖	西湖
		人文	仏教 詩歌	仏教 詩歌 庭園	仏教 詩歌 庭園	仏教、 詩歌、 庭園、 新観光 スポット	仏教、 詩歌、 庭園、 観光 スポット	詩歌、 庭園、 新観光 スポット	世界遺産
		施設	西湖 遊覧船	西湖 遊覧船 (発展)	西湖 遊覧船	西湖 遊覧船 (大発展)	西湖 遊覧船 記念館	新博物館 記念館 芸術館など	―
	観光行動		官遊 学遊 商遊 宗教遊	学遊 商遊 宗教遊 入国遊 年中行事	学遊 商遊 宗教遊 入国遊 年中行事	学遊 商遊 宗教遊 入国遊 年中行事	西湖 博覧会	個人または 家族・親友 旅行、 団体旅行、 年中行事、 市民レジャー	エコ・ ツーリズ ム？
	インフラ		京杭 大運河	京杭 大運河	京杭 大運河	京杭 大運河	滬杭鉄路 杭江鉄路 市内道路 電気 上水道 電気通信	鉄道、道路、 空港、港湾、 上下水道、 エネルギー、 電信・電話	交通問題 の解決が 期待される
	宿泊など関連施設		お寺	お寺 政府専用 と民間 宿泊施設	旅館 酒屋 茶屋	旅館 酒屋 茶屋 土産品	旅館 飲食店 手工業製品 案内 写真撮影屋	ホテル・旅館 飲食店 土産品商店街	―
開発・管理主体	開発行動		白居易の 治水工事	「蘇堤」 (北宋) 7回の整備 (南宋)	西湖浚渫、 蘇堤と白堤 の回復、 「楊公堤」 「小瀛洲」 「湖心亭」 「三潭印月」	皇帝南巡 による数 回の整備	西湖博覧会	西湖総合 保護工事	世界遺産 または エコ・ ツーリズム の宣伝が 期待される
	管理主体		政府	政府	政府	政府	政府	政府	政府
インパクト管理			―	―	―	―	財政収入と 観光客増加 他産業への 促進	観光客増加 滞在期間長い 交通問題 財政収入と 観光客増加 他産業への 促進	観光開発 と遺産保護 の両立を目 指す？ 持続可能 な観光へ の期待

(筆者作成)

これらによって、杭州西湖の観光空間が中華民国時代よりも非常に充実し、そして、新しい変化が見られる（表 6)。それは、都市の生活空間と重なってきたことである。杭州市で生活している市民にとって、日常生活の一部またはレジャーの空間であるので、市民の観光地に関するイメージや対応は都市の観光空間を構成する重要な一要素であると考えられる。特に、市民の意識を高めることは観光地としての持続性を保つことに対して役に立ち、または「持続可能な観光」を実現する方法の一つでもあろう。

2011 年に世界遺産に登録された杭州西湖は、その人文的・歴史的・建築的な価値が世界に認められ、同時に世界遺産の保護・保全と継承の役割も担っている。将来の展望として、世界遺産の登録を人文的資源と見なし、重視すべきであると思われる。世界遺産の保護・保全と観光推進の間には、対立の面があるが、この両者の間には相互的な促進作用も見られるだろう。世界遺産登録後の杭州西湖にとっては、持続可能な観光開発と遺産保護・保全に適応する管理方法が求められるのである。筆者の世界遺産への意識に関するアンケート調査の結果によると、現在の中国では、世界遺産という言葉を環境・保護と関連づけて考えている人が少なくないが、実際的な行動力がまだ足りない。杭州西湖の世界遺産への登録は政府が取り組んできたが、登録後の世界遺産の保護については市民の力が必要である。特に、西湖が杭州市民のレジャー施設に変化していくことによって、杭州市民にとって日常生活に属する西湖に関する保護は自分たちの生活空間を守ることでもある。したがって、杭州市民の保護意識の喚起と養成は杭州西湖保護の無形の力となるものであり、今後の課題になるだろう。つまり、政府、市民と観光業界関係者が観光開発と遺産保護の役割を分担し、その両者を両立させる開発行動と持続可能な観光を推進することが期待される。

注

1) ヘリテージ・ツーリズム（heritage tourism）とは、「ヘリテージ」を対象とした観光の考え方である。この「ヘリテージ」に該当する用語についてはみると、国内外の観光関連研究では世界遺産、文化遺産、文化財、歴史遺産、歴史的遺産、文化的遺産など多様な語があてられている。

2) 中国の場合では「古代」は19世紀中期以前をさすことが多く、そして、「上古」、「中古」、「近古」にも分けられる。「近古」は一般的には宋元明清の時代を指す。本論文の「古代」は主に「近古」の意味である。1840年は中国の古代と近代の境界線である。

3) 白居易（西暦 772－846 年）は河南省で生まれ、中国唐代の偉大な現実主義詩人として中国文学に深い影響を与えた。西暦822年に白居易は刺史として杭州に赴任してきた。白居易の杭州刺史としての最大の功績は西湖を修理し、堤を築いたことである。

4) 中国では「封建時代」とは、一般的に周から清までの時期をさすことが多い。1911年の辛亥革命で清朝が打倒されて中華民国が設立された。これで中国の封建時代が終わり、資本主義時代に入った。

5) 呉自牧が南宋末期に『夢粱録』を書き、南宋時代の臨安（現在の杭州）の様子を述べ表し、特に淳から咸淳年間（西暦 1241－1274）までの臨安を詳しく述べ表した。その中で、民俗と民芸に関する資料も少なくない。

6) 清圣祖康熙皇帝である愛新覚羅· 玄燁（1654年-1722年）、在位1661年—1722年。

7) 清高宗乾隆皇帝である愛新覚羅· 弘历（1711年-1799年）、在位1735年—1796年。

8) 清世宗雍正皇帝である愛新覚羅· 胤禛（1678年-1735年）、在位1722年—1735年。

9) 『湖山便覧』は乾隆年間に翟灝と翟翰が書いた杭州のガイドブックである。

10) 中華民国は1912年に中国大陸に成立し、1949年以降現在まで台湾島と周辺の島嶼群などを実効支配している。

11) 第一回西湖博覧会は1929年6月6日に開催され、同年10月10日に終わった。参加者数は約2,000万人に達し、会期は137日間に渡った。革命記念館、博物館、芸術館、農業館、教育館、シルク館、工業館、衛生館という8の展覧館が設置された。

12) 『民国時期杭州市政府档案史料匯編』（1927－1949）が杭州市档案館によって編集された。現在、杭州図書館が所蔵する。

13) 『杭州市経済調査』（1932）が建設委員会調査浙江経済所によって編集された。現在、

杭州図書館が所蔵する。

14) 改革開放とは、中華人民共和国の鄧小平の指導体制の下で、1978 年 12 月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議で提出、その後開始された中国国内体制の改革および対外開放政策のこと。鄧小平は「四つの近代化」を掲げ、市場経済体制への移行を試みる。基本原則は先富論に代表されるように、先に豊かになれる条件を整えたところから豊かになり、その影響で他が豊かになればよいという考え方である。

15) 大躍進は、社会主義改造済みの中華人民共和国にて、数年間で経済的に米英を追い越すことを目的に、毛沢東が 1958 年から 1960 年まで施行した農工業の大増産政策である。しかし、農村の現状を無視した強引なノルマを課した上、三年自然災害も重なった結果、推計 2000 万人から 5000 万人ともいわれる餓死者を出し大失敗に終わった。

16) 西湖総合保護工事は 2001 年から、西湖歴史景観の回復と「世界遺産登録」を目標として、生態保護と環境保全に伴い、西湖景勝区に関する総合的な整備工事である。

17) 2002 年に杭州市政府は「還湖与民、還緑与民」の目標に基づいて、「無料西湖」という制度を施行し、西湖景勝区の一部を無料で観光客と市民に公開した。現在まで、個別の観光スポットを除いて西湖景勝区は殆ど無料である。

参考文献

新井　直樹 2008 世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察.『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会) 11-2. pp. 39-55

石井　英也 1970 わが国における民宿地域形成についての予察的考察. 地理学評論 43－10. pp. 607-621

石森　秀三 2001 内発的観光開発と自律的観光. 石森秀三・西山徳明[編]『ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究』国立民族学博物館. pp. 5-19

江口　信清・藤巻正己[編]　2011 『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版.

落合 康浩 1991 神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開. 経済地理学年報 37. pp. 245-265.

梶田　真・仁平　尊明・加藤　政洋[編] 2007『地域調査ことはじめ』ナカニシヤ出版.

神田　孝冶[編] 2009『観光の空間』ナカニシヤ出版.

神田　孝冶 2010 熊野の観光地化の過程とその表象. 国立歴史民俗博物館研究報告. 156. pp. 137-161.

呉羽　正昭 1999 日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容. 日本生態学会誌 49. pp. 269-275.

呉羽　正昭 2003 レクリエーションと環境保全. 高橋伸夫[編]『21 世紀の人文地理学展望』古今書院. pp. 239-251.

呉羽　正昭 2009 日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性. 地理科学 64. pp. 168-177

古村　学 2011 エコツーリズム研究. 江口信清・藤巻正己[編]『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版.

淡野　明彦 1985 沿岸域における民宿型観光地域の形成--三重県鳥羽市相差地区の事例. 地理学評論. pp. 19-38.

淡野　明彦 1986 沿岸域におけるリゾート型観光地域の形成. 人文地理. 38. pp. 7-25.

淡野　明彦[編] 1998『観光地域の形成と現代的課題』古今書院.

淡野　明彦 2003 観光研究の視野的発展をめざして－アーバン・ツーリズム研究への取り組み－. 高橋伸夫[編]『21 世紀の人文地理学展望』古今書院. pp. 227-238.

淡野　明彦[編] 2004『アーバンツーリズム―都市観光論―』古今書院.

淡野　明彦 2008 世界遺産と観光に関する地理的アプローチ. 地理空間. 1－2. pp. 114－127.

鶴田　英一 1994 観光地理学の現状と課題. 人文地理. 46. pp. 66-84

峯俊　智穂 2011 ヘリテージ・ツーリズム研究. 江口信清・藤巻正己[編]『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版.

杜　国慶 2005 世界遺産麗江古城における空間構造に関する考察. 立教大学観光学部紀要. 7. pp. 21-29.

林　上 1984 金融・サービス業. 経済地理学会[編]『経済地理学の成果と課題 第Ⅲ集』大明堂. pp. 127-140.

ペダーセン, A. 著. 世界遺産年報編集部訳 2008 世界遺産と観光. 世界遺産年報. 13. pp. 40-43.

溝尾　良隆 1997 観光とリゾート開発. 経済地理学会[編]『経済地理学の成果と課題 第Ⅴ集』大明堂. pp. 223-232.

山村　順次 1967 東京観光圏における温泉観光地の地域的展開. 地理学評論. 40. 11. pp. 625-641

山村　順次 1977 観光. 経済地理学会[編]『経済地理学の成果と課題 第Ⅱ集』大明堂. pp. 203-214.

山村　順次[編] 1995『新観光地理学』大明堂.

山村　高淑 2001 中国の歴史的市街地における居住形態と観光商業化の実態に関する調査・分析. 日本建築学会技術報告集. 13. pp. 191－194.

山村　高淑・張　天新・藤木　庸介[編] 2007『世界遺産と地域振興』世界思想社.

山本　健兒・山田　晴通 2010 観光・ツーリズム. 経済地理学会[編]『経済地理学の成果と課題 第Ⅶ集』大明堂. pp. 117-384.

周　峰 1992 『杭州歴史从編』浙江人民出版社.

杭州市档案館 1927－1949『民国時期杭州市政府档案史料匯編』杭州市档案館編.

杭州市旅委 2007『杭州市旅游業発展規划(2006-2010)』杭州市旅委編.

杭州市交警支隊景勝区大隊 2005 西湖景勝区道路交通管理模式探討. 中国風景名勝. 2005-1. pp. 73-78.

杭州西湖景勝区管理委員会 2005 新的突破、新的起点 西湖風景名勝区保護管理体制的思

考. 中国風景名勝. 2005-1. pp. 34-40

胡　文革・賀　弢・馮　玉香 2011 免費西湖経営模式的探索. 統計科学与実践. 2011-04. pp. 46-47.

建設委員会調査浙江経済所 1932『杭州市経済調査』建設委員会調査浙江経済所編.

魯　国明 1994 開創西湖旅游的新局面. 浙江統計. 1994-10-15. pp. 17-19.

劉　思敏・劉　民英 2011 杭州西湖景区免費模式的実質及可複制性分析. 旅游学刊. 2011-10. pp. 50-57.

施　奠東 1995 『西湖志』上海古籍出版社.

滕　玮峰 2008 杭州西湖景区門票創新体制的效益評価. 浙江旅游業創新与発展論文集. 2008-06-01. pp. 238-242.

林　家寧[編] 2005『中国風景名勝』(2005 年第一期月刊) 中国風景名勝編集部.

張　建融[編] 2011『杭州旅游史』中国社会科学出版社.

参考資料

浙江省観光局 2000『浙江省国民観光状況調査』浙江省観光局編.

Google マップ http://maps.google.co.jp（最終閲覧日 2012 年 10 月 20 日）

杭州統計調査信息網 http://hzstats.gov.cn（最終閲覧日 2012 年 11 月 20 日）

中国国旅ホームページ http://www.sh51766.com/（最終閲覧日 2013 年 1 月 18 日）

謝　辞

本論文の作成にあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧に指導して下さった安食和宏先生に心より感謝致します。

そして、本論文をご精読頂き有用なコメントを頂きました中川正先生に感謝致します。

また、本研究を協力して頂いた調査対象者の皆様に心から感謝致します。

最後になりましたが、家族と同窓生の皆さんから精神的に支えられ、ありがとうございます。